

八日市場市大堺・塔ノ前遺跡

—主要地方道八日市場野栄線・緊急地方道路整備事業埋蔵文化財調査報告書—

平成 8 年 3 月

千葉県土木部

財団法人 千葉県文化財センター

よう か い ち ば おお さかい とう の まえ

八日市場市大堺・塔ノ前遺跡

—主要地方道八日市場野栄線・緊急地方道路整備事業埋蔵文化財調査報告書—



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第285集として、千葉県土木部の主要地方道八日市場野栄線・緊急地方道路整備事業に伴って実施した八日市場市大堺・塔ノ前遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、中近世陶磁器や金銅製持国天像が出土するなど、この地域の中近世の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また文化財の保護、普及のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成8年3月29日

財団法人千葉県文化財センター

理事長 中村好成

凡　　例

- 1 本書は、千葉県土木部による主要地方道八日市場野栄線建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県八日市場市横須賀字大堺311-1ほかに所在する大堺・塔ノ前遺跡（遺跡コード214-006）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、成田調査事務所副所長高田　博が行った。
- 6 小金銅仏の鑑定に当たっては、東京芸術大学美術学部教授水野敬三郎氏に御指導、御教授を得た。また、小金銅仏の計測については、埼玉県立博物館学芸員西口由子氏から御教示いただいたが、原則的に一般の仏像の計測方法に従っている。瀬戸美濃産陶磁器については、動瀬戸市埋蔵文化財センター調査係長藤澤良祐氏から御教示いただいた。
なお、土質ボーリング調査は、パリノ・サーベイ株式会社に委託し、その成果を付章に掲載した。
- 7 発掘調査から報告の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、八日市場土木事務所、八日市場市教育委員会の御指導、御助言を得た。
- 8 本書に使用した地形図は、下記のとおりである。
 - 第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図「八日市場」(N1-54-19-6-4)
 - 第2図 八日市場市役所発行 1/2,500都市計画図「28・34」
 - 図版1 国土地理院発行 1/25,000「土地条件図 八日市場」
- 9 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による平成7年撮影（コース番号C20A-58）のものを使用した。
- 10 本書で使用した図面の方針は、すべて座標北である。

目 次

Iはじめに.....	1
1. 調査の経緯と経過.....	1
2. 遺跡の位置と環境.....	5
II検出した遺構と遺物.....	9
1. 遺構.....	9
2. 遺物.....	11
IIIまとめ.....	23
1. 中近世の横須賀.....	23
2. 小金銅仏について.....	24
付章 八日市場野栄線 大堺・塔ノ前遺跡ボーリング調査報告.....	27
報告書抄録.....	卷末

挿図目次

第1図 遺跡地形図.....	2
第2図 確認トレンチ配置図及び土層断面図.....	3
第3図 確認トレンチ配置図（2）.....	4
第4図 遺跡の位置と周辺の遺跡.....	7
第5図 第2地点遺構全測図.....	10
第6図 グリッド出土縄文土器実測図.....	11
第7図 カワラケ、土鍋、焙烙、土釜実測図.....	13
第8図 土釜、火鉢、陶器実測図.....	14
第9図 陶磁器実測図.....	16
第10図 砥石、陶器転用砥石実測図.....	17
第11図 小金銅仏実測図.....	18
第12図 陶磁器、硯、宝篋印塔実測図.....	20
第13図 木製品実測図.....	22
第14図 元禄8年（1695）の横須賀村絵図と 八日市場野栄線.....	24
第15図 千葉県内小金銅仏・神像出土分布図.....	26

表 目 次

表1 周辺の遺跡一覧	
表2 小金銅仏観察表	

表3 千葉県内小金銅仏・神像一覧	
------------------	--

図版目次

図版1 遺跡周辺航空写真（1/10,000）	2. 第2地点遺物出土状況
図版2 1. 遺跡遠景	3. 第3地点発掘状況
2. 確認調査実施状況（平成3年度）	図版5 グリッド出土縄文土器及びカワラケ
3. 確認調査実施状況（平成6年度）	図版6 土鍋、焙烙、土釜、火鉢
図版3 1. 第2地点東側	図版7 陶磁器（1）
2. 第2地点西側	図版8 陶磁器（2）
3. 土坑検出状況	図版9 陶磁器（3）、砥石
図版4 1. 第1地点遺物検出状況	図版10 小金銅仏、宝篋印塔、硯、木製品

I はじめに

1. 調査の経緯と経過

(1) 調査の経緯

八日市場野栄線は八日市場市の中心部から野栄町西沢に至る、総延長6.2kmを測る主要地方道であり、近年の八日市場市域における交通量の増加に伴い道路の整備が急がれてきた。そこで、千葉県土木部では道路整備事業の一環として、市内横須賀地先で市街地を通る部分を迂回し、国道296号線に驚くバイパス工事を計画した。これに伴い県土木部から千葉県教育委員会に予定地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会があり、現地踏査したところ、予定地は横須賀城の西側に隣接し、陶磁器の散布が認められること、また、周辺地域には縄文時代の丸木舟が数多く出土していることが確認された。

その後、協議の結果、事業の性格上現状で遺跡を保存することが難しいため、記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を担当することになった。

(2) 調査の経過

ア 確認調査

平成3年度の調査は平成3年11月1日から12月26日まで実施し、技師沖松信隆が担当した。調査区を二分するよう横須賀の砂堤部が位置し、それより北西に540m、南東に700m、総延長は1,280m、幅は20mほどではほぼ直線状に続いている。面積は22,240m²を測る。北西側の50m、南北西側の300mを除いては調査区の中央に幅8mほどの市道が走っている。その両側の水田に1m×1.5mの大きさを基本としたグリッドを2列に平行するよう設定した。発掘面積は644m²を測る。調査区が全長1,280mと長く、水田の堆積土が多量に排出されることが予想されることからクラムシェル導入による掘下げを実施し、人力によって堆土内の遺物の有無を確認するとともに、土層断面図を作成した。

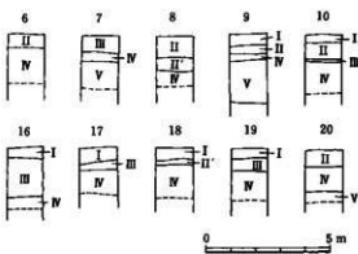
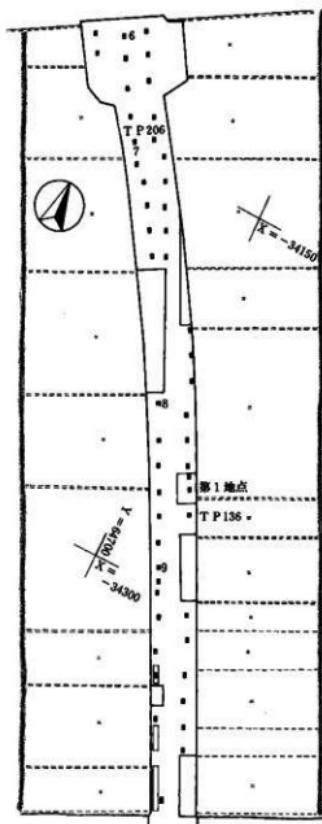
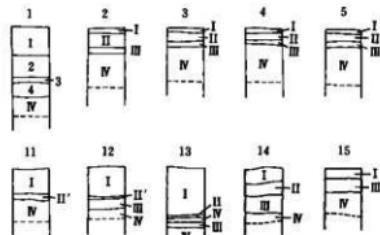
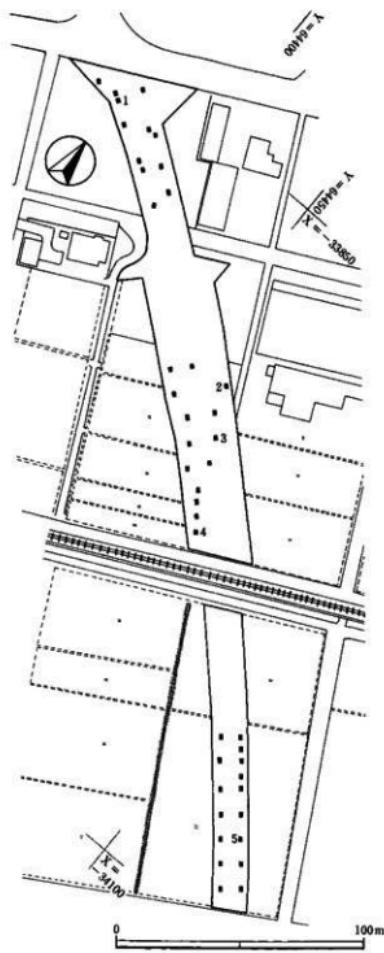
その結果、水田部分は水田耕作土の暗褐色泥炭層の下は砂層となり、砂層中から縄文時代後期の土器の出土地点を2か所確認することができ、200m²が本調査区となった。また、中央部の砂堤部は溝数条や土坑5基、中世から近世の陶磁器などを検出し、800m²を本調査することになった。

平成6年度の調査は平成6年11月1日から11月21日まで実施し、技師沖松信隆が担当した。調査区は北西側の大利根用水から国道296号と交差する起点までの360mに及ぶ区間が調査対象となり、その面積は6,530m²を測る。平成3年度の確認調査と同様に稻刈り後の水量の少ない休耕時に実施することとした。調査を開始した時点で3か所ほど用地の交渉中の土地があり、その部分は確認調査の対象から外し、その周辺に確認グリッドを濃密に設置することで対処した。グリッドは前回と同様に1m×1.5m、2m×2mを中心にして設定し、地山面までの深度があるところは5m×5m等のグリッドを適宜設定した。発掘面積は244m²を測る。各土層断面図を見ると、現水田面下は深さ20cmから60cm、概ね40cmほどの暗褐色泥炭層が存在し、その下層は黄灰色、青灰色の砂層へと続く。交差点近くは盛土が2mほど積まれ、地山層は青灰色砂層であった。出土遺物は青灰色砂層中に縄文土器の小破片がわずかに検出されたのみで、遺構等は検出されず、本調査には至らなかった。

イ 本調査

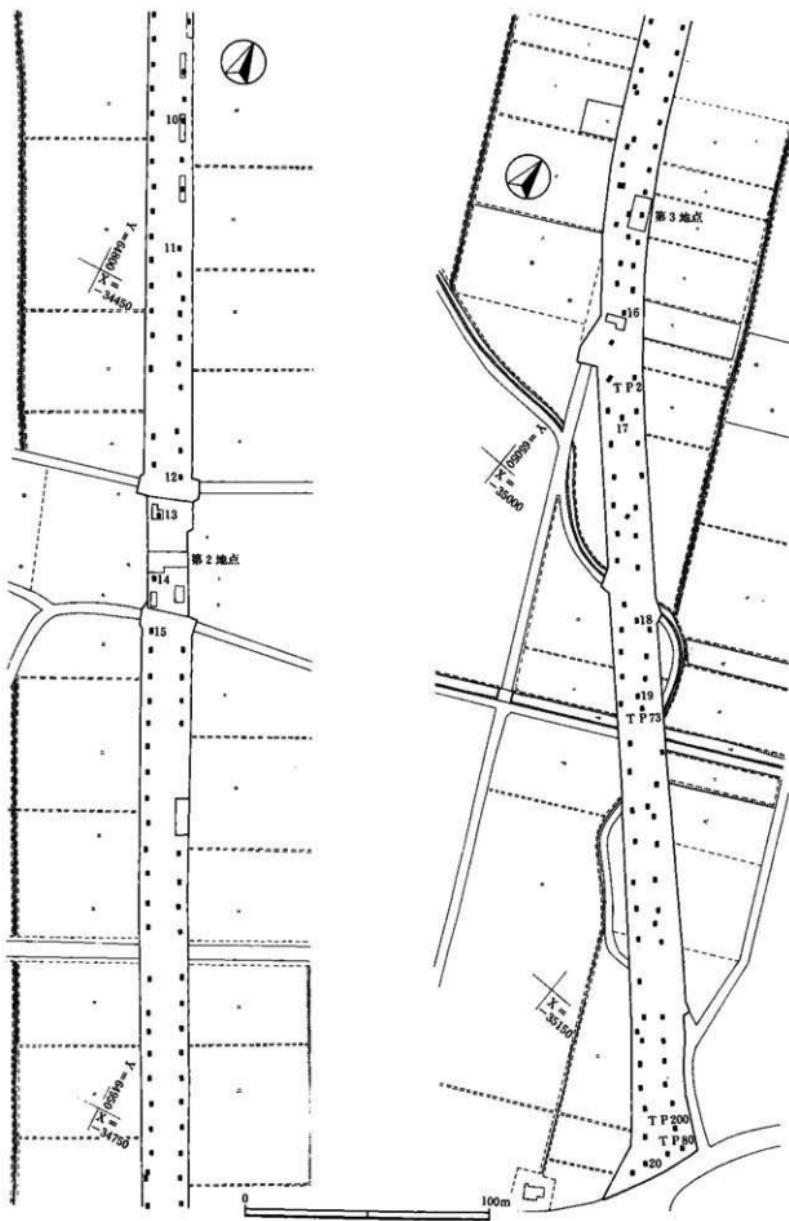


第1図 遺跡地形図 (1/10,000)



- 1 土（黄褐色土）
 2 砂土（青灰色粘質砂等）
 3 粘灰色粘質土等
 4 粘褐色土砂を主体
 I 農作土（褐色土）
 II 黄褐色泥炭層
 II' 墓褐色泥炭層（鐵線を含む）
 III 青灰色砂層
 IV 青灰砂層
 V 墓褐色砂層（墓褐色砂層の間隔が入る）

第2図 確認トレンチ配置図 (1/2,000) 及び土層断面図 (1/200)



第3図 確認トレンチ配置図(2) (1/2,000)

平成3年度の確認調査結果を受けて、平成4年7月1日から9月30日まで実施した。調査は班長代理岡田誠造が担当した。発掘区は北西側（第1地点）・南西側（第3地点）の水田面の各々100m²、砂堤部（第2地点）の800m²である。

発掘調査は砂堤部から開始することとし、7月当初から着手した。調査区の中央を市道が走り、さらに両端を交差する市道が生活道路として使用されているため、南側の60m²は調査が不可能であった。北側の400m²については、最初に西側のはば半分を遺構検出面までバックホウで掘り下げ調査を開始した。西側の調査終了後東側を同様に調査し、8月末に終了した。

水田地区の2か所は8月末から調査を開始した。それに先立ち湧水防止のためのシートバイル鋼板で囲繞し、調査区を設置し、遺物出土レベルのやや上方まで八日市場土木事務所が掘り下げを行った。その後、水中ポンプで水を汲み上げながら人力により掘り進んだ。その結果、第1地点では標高4.4m～4.7m、第3地点では3.5m～3.8mの砂層の上部において縄文土器数個体分が出土したが、遺構等は検出されなかつた。9月末に調査区を埋め戻し、調査を終了した。

なお、調査の後半に至って、発掘調査が及ばない2m以下の深度について、ボーリング調査を委託した。

ウ 整理作業

平成7年1月4日から2月28日まで成田調査事務所副所長高田 博が実施した。

2. 遺跡の位置と環境

八日市場市の市街地は、九十九里浜から続く低地の最奥部、北総台地の山裾に沿って、幅数百mほどに展開する。その中を旧国道126号、その外側に国道126号バイパスが走り、それより東側は昭和30年代の耕地整理によって長方形に整然と区画された広大な水稻地帯が広がっていく。そして、水田の間をぬって總武本線が国道と平行に走り、そのすぐ東側は大利根用水や大小支流が流れている。集落はこれら水田の中の微高地に点在している。

発掘調査区は、北総台地から九十九里浜に向かい、平野部を直交する路線内に位置している。市街地南西部で交差する国道296号と国道126号バイパスとの交差点を起点とする。埋め立てられ宅地化したところを過ぎると一面水田が広がり、100mで總武本線さらに100mで大利根用水を渡り、水田中を500m進むと民家が点在する横須賀地区的西端の微高地に至る。調査区は水田中をさらに700m進み、総延長は1.7kmほどを測る。起伏はほとんどなく、起点で標高6.5m、中程の微高地で7.5m、遺跡の東南端で6.0mを測る。

現在の水田面は縄文時代の海進最盛期には海底となり、以後徐々に海退が進み縄文時代後期には横須賀等の砂堤を形成しながら、淡水化し泥炭層の発達した堤間湿地ができあがった。この泥炭層が堆積する一帯は縄文時代後期の丸木舟が10數艘出土しており、下出羽旧新田に所在した下沼丸木舟出土地が本発掘調査区中ほどの東側に近接している。

また、調査区の中ほどの微高地には横須賀城跡が所在する。「千葉県八日市場市埋蔵文化財分布地図」によると本調査区の東側の200mほどが城の範囲となり、現在長徳寺の北側に残る堀が横須賀城西端の堀に当たると考えられている。明治16年測量の陸軍迅測図から、横須賀地域の北側と南側に細長く沼が広がっていたことがわかる。また、さらに遡って元禄8年(1695)の「横須賀村絵図」には、長徳寺の北側は水田でその周りは広く沼であったことが描かれている。したがって、横須賀城は中世にあっては広く沼に囲まれた天然の要害の地であったと考えられる。

そこで、横須賀城と長徳寺を中心に匝瑳、横須賀地域の中世から近世にかけての歴史を概観してみる。¹⁾
平安時代後期には平忠常の子孫として平氏一族が匝瑳地域を開拓し、千田莊（多古町から八日市場市一千田氏）、匝瑳北条莊（八日市場市北部から干渴町・領主不詳）、匝瑳南条莊（八日市場市南部から光町野榮町・紀伊国熊野神社領）などの莊園が形成される。調査地点はこの匝瑳南条莊に含まれる。しかし、源頼朝に敵対したため、下総国守護として千葉常胤一族が入部して平氏を追い出す。

長徳寺は真言宗で山号を龍臘山、院号を地藏院という。「長徳寺由来記（仮称）」によれば、延久2年（1070）から承保元年（1074）に源頼義の六男の伊予の阿蘭利が横須賀に地蔵堂を築いたのが始まりとされる。しかし、養和元年（1181）に起きた養和の乱により、横須賀城をはじめ当地にあった定光寺、地藏院、慧眼院、文殊院等が焼失した後、文治年間（1185～1189）に長徳寺、慧眼院を現在の位置に再建したと言われる。

鎌倉時代になると、匝瑳一族である匝瑳、鷲尾、飯高、湯浅氏などが匝瑳党と呼ばれる武士団を形成し、地頭として莊園を經營した。後、匝瑳北条莊では匝瑳氏から分かれた飯高氏（飯高城・八日市場市）、椎名氏、三谷氏（新村城・八日市場市）、鎌木氏（鎌木城・干渴町）などが在地領主として展開した。

明徳年間（1390～1393）横須賀城主古積内蔵之助が、鎌木氏・匝瑳氏の策略により自刃に追い込まれ、匝瑳氏が横須賀城を占領し、長徳寺も無住になったという伝承が残っている。横須賀城が別称「こすめ城」と言われるゆえんである。応永23年（1416）上杉憲秀の乱の余波で横須賀全村焼討ちにあり、長徳寺も焼失する。しかし、6年後の応永29年長ばん上人が長徳寺を再興する。（「山崎家文書」）

15世紀半ばには、千葉宗家をめぐる内乱が西脇の多古城、志摩城（多古町）で起こり、匝瑳郡内の領主も巻き込まれていく。このころ当地域には千葉氏の重臣押田氏が進出し、八日市場城、横須賀城の城主となり、在地領主椎名氏と争う。以後押田氏は天正18年（1590）まで当地を支配した。（「恵光院過去帳」）長徳寺は押田氏の庇護のもと、七堂伽藍を整え繁栄していく。長徳寺所蔵不動明王の胎内に「下総国匝瑳横須賀長徳寺… 天文二年…」の墨書銘があり、中興以来の繁栄を伺わせるとともに、天文2年（1533）に長徳寺が所在していたことを証明する貴重な資料となっている。その他にこのころの作品としては重要な文化財の愛染明王画像、普賢誕命菩薩画像と五大明王画像などが当寺に残されている。

江戸時代の横須賀は城としての機能を失い、直參相給領となり、長徳寺は中本山として坂田靈通寺、東谷安養寺らをはじめとして、下寺、孫寺は下総、上総両国に併せて六十余か寺をかぞえた。（安永9年「人別御改帳」）

しかし江戸末期以降は衰退の一途をたどり、慧眼院、西蓮院等の末寺がこのころから明治はじめにかけて廃寺となつた。

注1. 長徳寺はじめ横須賀地区の歴史、伝説に関しては長徳寺檀家山崎貞幹氏より多くの文献や写真資料の提供を受けた。

2. 墨書銘は3種類あり、詳しくは「八日市場市史」を参照されたい。



第4図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/25,000)

表1 周辺の遺跡一覧 (「千葉県埋蔵文化財分布地図(2)」(財)千葉県文化財センター 昭和61年3月より抜粋)

遺跡番号	遺跡名	所在地	種別	遺跡概要		
				時代(時期)	遺構・遺物等	立地・現状
1	下沼丸木舟出土地	下出羽旧新田	包含地	縄文(後?)	完形、U型、底部厚肉	低地、水田
2	七間堀丸木舟出土地 ⁽¹⁾	下出羽	包含地	縄文	副部だけ1/3	低地、水田
3	七間堀丸木舟出土地 ⁽²⁾	下出羽	包含地	縄文	小破片で4隻分	低地、水田
4	篠曾根丸木舟出土地	高野寺登谷	包含地	縄文	完形、U型、底部厚肉	低地、水田
5	長割丸木舟出土地 ⁽¹⁾	赤字大堀	包含地		完形、U型、横梁	低地、水田
6	長割丸木舟出土地 ⁽²⁾	赤字大堀	包含地	縄文	完形、U型	低地、水田
7	長割丸木舟出土地 ⁽³⁾	赤字大堀	包含地	古代	完形、U型、横梁、底部厚肉	低地、水田
8	長割丸木舟出土地 ⁽⁴⁾	赤字大堀	包含地	縄文	1/2完形、横梁	低地、水田
9	長割丸木舟出土地 ⁽⁵⁾	赤字大堀	包含地			低地、水田
10	長割丸木舟出土地 ⁽⁶⁾	赤字大堀	包含地	縄文	完形	低地、水田
11	長割丸木舟出土地 ⁽⁷⁾	赤字大堀	包含地	縄文	破片	低地、水田
12	残し沼丸木舟出土地	米倉	包含地			低地、水田
13	さんずい沼丸木舟出土地	椎須貫	包含地	縄文		低地、水田
14	横須賀城跡	横須賀1219地先	城跡	中近世		低地、神社、宅地
15	下谷遺跡 ⁽¹⁾	横須賀字下谷	散布地			低地、畠
16	下谷遺跡 ⁽²⁾	横須賀字下谷	散布地	平安	土師器(国分)	低地、畠
17	林表遺跡	高字林表	散布地	平安	土師器(国分)	低地、畠
18	道の口遺跡	高字道の口752地	散布地	縄文(後)	縄文土器(加曾利B)	低地、畠
19	高田遺跡	宮川高田及び水神	包含地	縄文(後)	縄文土器(加曾利B)	低地、水田
20	米倉城跡	赤字城台2697地先	城跡	中近世		台地、山林、畠、寺院
21	要害台城(八日市場城)跡	赤字城之内2085地先	城跡	中近世	多郭同心円	台地、宅地
22	新城跡	赤字新城2304地先	城跡	中近世		台地、山林、畠
23	匝瑳城跡	赤字西之城1630地先	城跡	中近世		台地、学校
24	松山城跡	松山中宿1123	城跡	中近世		台地、神社
25	椿城跡	椿字台2075地先	城跡	中近世		台地、山林、畠
26	平台遺跡	口字平台571地先	散布地	古墳(後)、奈良、平安	土師器(鬼高~国分)	低地、畠
27	新城遺跡	赤字新城及び後谷地	散布地	古墳(後)、奈良、平安	土師器(鬼高~国分)	低地、畠
28	生尾遺跡	生尾	散布地	古墳(後)、奈良、平安	土師器(鬼高~国分)	低地、畠
29	西ノ内遺跡	宮本字西之内289地先	散布地	古墳(後)、奈良、平安	土師器(鬼高~国分)	低地、畠
30	平台遺跡	宮本字平台463地先	散布地	古墳(中・後)、奈良、平安	土師器(五箇~国分)	低地、畠
31	福岡遺跡	赤字福岡1430地先	散布地	古墳(後)、奈良、平安	土師器(鬼高~国分)	低地、畠
32	松山貝塚	松山字見初田	貝塚	縄文(早?)	炉穴、縄文土器(葛ヶ島台)、石巖	台地、山林

II 検出した遺構と遺物

1. 遺構

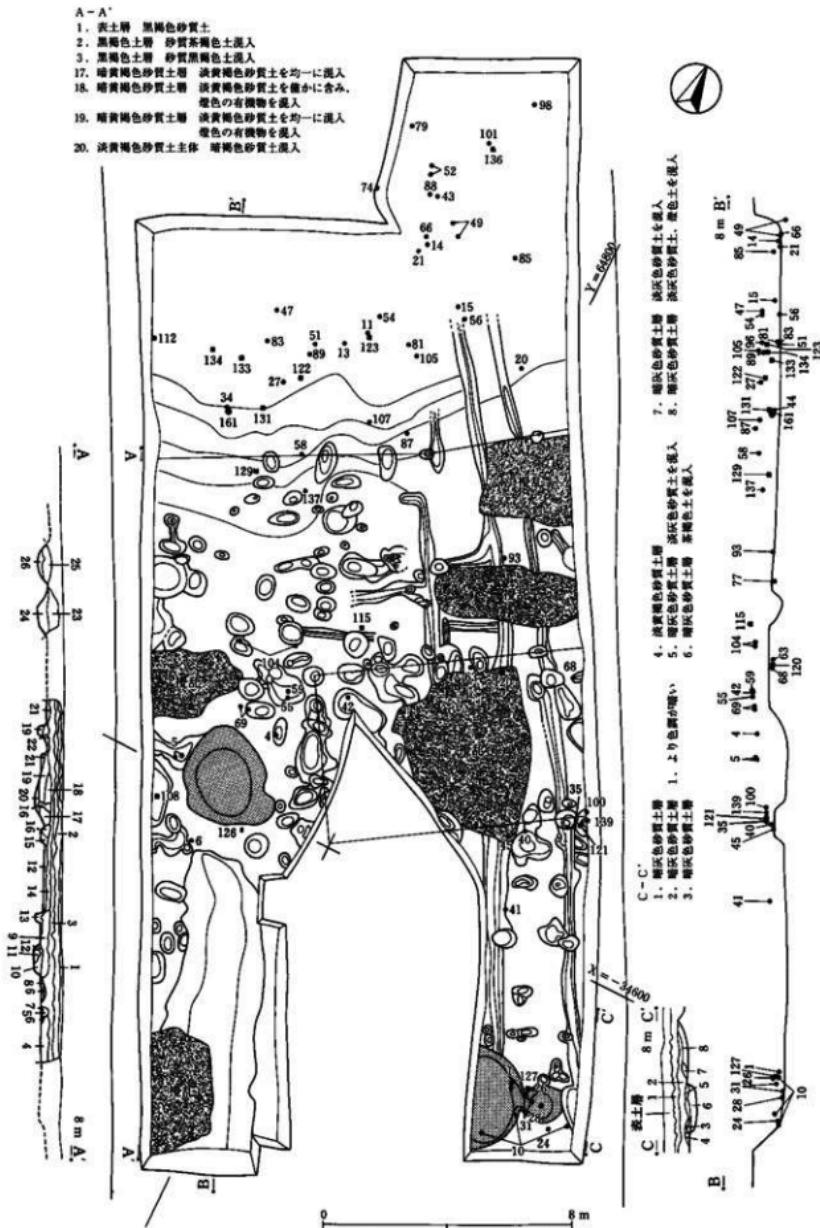
遺構が検出されたのは砂堤部の第2地点である。調査地点の地山は砂層であり、かなりもろく崩壊しやすいので、各遺構間と基本層序との関係がつかみづらい。そのため各遺構と基本層序との切り合い関係が、不明瞭な部分があることを断っておきたい。

表土層直下から黒褐色～暗褐色の有機質土が30cm～40cmほどの深さで堆積し、この層を中心に遺物が出土している。また、この層はさらに3層に細分できる。上から黒褐色土（1層）、暗褐色土（2層）、暗黃褐色土（3層）の順になる。ただ、各層ともかなり薄い上、調査地区が必ずしも平坦ではないので、出土遺物の帰属層が明瞭ではない。しかし、全体的傾向として、古い遺物はレベルの低い位置から出土していることがわかる。すなわち、1層では18世紀ごろの遺物を中心に近世陶磁器を含む。2層、3層はそれよりも古い遺物を含む地層となる。

調査区内にはかなり攪乱が見られるが、遺構は北側の低地の部分を除いてほぼ全域に検出された。北側では標高が徐々に低くなるにつれ、黄褐色土層が続くだけで遺構がなくなり、遺物の出土レベルも下降してゆく。したがって、ここは元来湿地帯で、これより北側には遺構はないものと考えられる。

遺構は土坑、小ピット群、溝に分類される。直径3mほどの円形プランとなる大型の土坑が2基検出された。北西のものは深さ50cmを測り、底面は平坦である。南東のものは半分ほどしか調査していないが、深さは40cmほどで、底面は平坦である。同時期の小型のピットと重なっている。覆土中に3層の堆積が見られるので、3層の形成以前に掘られた遺構である。3層下の覆土中からは、14世紀末から15世紀代にかけてのカワラケ、土鍋、内耳鍋、石造物片等が出土している。掘り込まれた地山層がどのようなものであるかわからないが、この規模のものは該期の井戸又は墓坑の可能性が高い。次に、小ピット群は長径30cm～120cm、深さ30cm～50cmの楕円形プランを呈し、50cm～60cmのものが中心となる。ほぼ全域に検出された。中でも中央に等間隔に方形に並ぶものがあり、土層断面からは柱痕は確認できないが、少なくとも1軒以上の掘立柱建物を想定できる。覆土中からは大窯期の稟皿が出土しているので、16世紀代の遺構と考えられる。また、北側傾斜面に平行するように並ぶピット群は柵列の可能性がある。したがって、2層、3層については15世紀末以降17世紀代までの時期の整地層と考えられる。調査区東端に半裁状態で調査した直径80cm、深さ46cmの小ピット中から、18世紀代の内耳培培、火鉢、磁器筒型碗などとともに小金銅仏1体が出土した。この遺構は当時のゴミ穴であろうか。

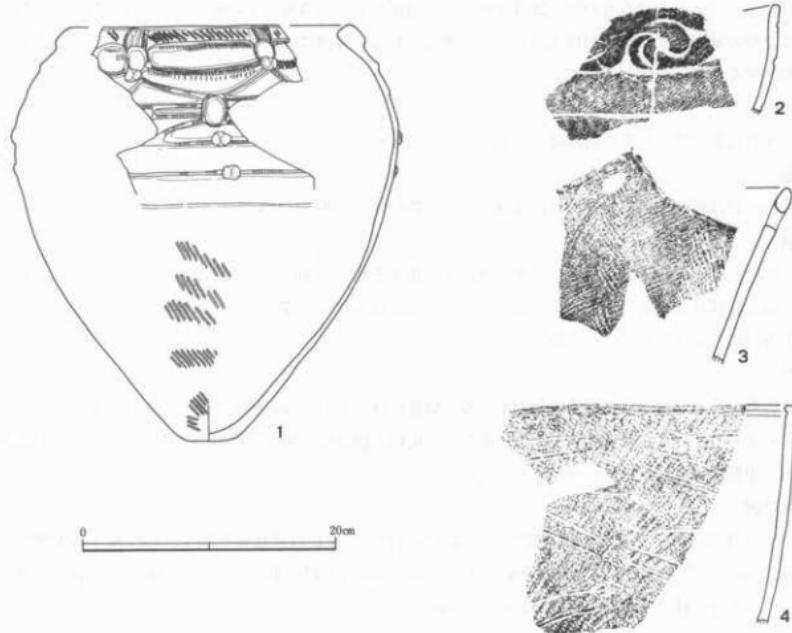
次に、溝状遺構が数条検出され2種類に分類される。まず、調査区の東側に沿って3条の溝状遺構が平行に走り、それに直交するよう2条の溝状遺構が検出された。溝の幅は30cm～50cm、深さ10cm～15cmほどの小規模なもので、それぞれの間隔は1m～2mほどである。覆土中からは17世紀代の肥前系の陶器鉢が出土している。また、調査区の南西に幅3m、深さ30cm～40cmの溝状遺構が9mにわたって検出された。この溝は調査区南東側に続いている。出土遺物はほとんどない。この溝は大きな区画に伴う溝と判断される。



2. 遺物

(1) 繩文時代の遺物

第1地点・第3地点から縄文土器が出土している。1は平縁の精製土器で肩部に最大径をもち、口縁部が内済し甕形を呈する。器壁は全体に薄くつくられるが口縁部は肥厚し、横位のLR縄文が施される。その下方は三角、逆三角形、長方形状の区画を作り、その間に円形の区画や粘土紐を貼り付けた小突起で強調する。各区画は細隆帯を削り出して作り、その上に半截竹管で刻目、両側に刻目か沈線が添う。胴部以下は横位か斜位のLR縄文が施される。底部は全周するが上半を欠損し、口縁部とその直下は遺存が少ない。推定の大きさは口縁部22cm、肩部の最大径32.5cm、器高31cmを測る。第1地点で出土した。2では口縁部の頂部に沈線による崩れた渦巻文をつくり、一部LR縄文が残りほかはすり消される。その下方に2条の平行沈線が巡り、その間は横位のLR縄文が施される。同じく第1地点で出土した。3は波状口縁部の波頂部直下に梢円形の小孔が穿たれる。LR縄文が上下を中心に施される。外面は炭化粒が付着する。第1地点東南5mのTP136で出土した。4は地文にLR縄文を横位に施し、斜位の2状単位の沈線が描かれる。第3地点で出土した。



第6図 グリッド出土縄文土器実測図 (1/4)

(2) 歴史時代の遺物

ア 第2地点出土遺物

土器、陶器、磁器、石製品、小金銅仏、金属製品などがある。ここでは、遺構内や整地層から出土した遺物をすべてまとめて、遺物の種類ごとに分類して説明する。

カワラケ

1～20はいわゆるカワラケで、ロクロを使用し、底部はすべて回転糸切り痕を残している。大きく5つのタイプに分類できる。Aタイプは1～6で、口径10.4～11.6cm前後、器高2.4～3.0cmのもので内面は底部から緩やかに口縁に延び、口縁端から膨らむのが大きな特徴である。胎土中には白色砂粒と鉄分粒を多く含む。時期は14世紀後半から15世紀代と考えられる。Bタイプは7～10で、薄手で内面の立上がり部分がくぼむのが大きな特徴である。出土層位、時期ははっきりしないが、Aタイプに比べ近世的要素の強いもので、16世紀代であろうか。Cタイプは11～13で、体部片のみであるが、直線的に端部をつまみ出す。20及び21は小型のものである。Dタイプとした21は口径5.6cmで、二段口縁を成している。Eタイプの20は口径7.6cmで、口縁端の整形はCタイプと同一である。

土鍋

22～28、30～34は土師質の土鍋の口縁部破片で、口縁端を内外両面につまみ上げている。24、26は内面方向に強くつまみ上げるもので、26は使用により端部がかなり磨滅している。30、31は内耳土鍋で31は内側に2つの耳が付く。33、34は土鍋の底部と考えられる。外面にはいずれも煤が付着している。時期は14世紀後半から15世紀代と推定される。

焙烙

35、36は近世焙烙である、内耳は丸く大型のものである。

土釜

29、38～42は外耳土釜である。41には胴部中央に鈎が付く。外面にはいずれも煤が付着している。

火鉢

43～48は火鉢で、44、45は外面にスタンプによる花文を施す。46は一見須恵器のタタキ目のように見える飛び鉋と呼ばれる手法によるカンナ削り痕が規則的に見られる。47の破片には外面から内面に向かって斜め上方向に孔が穿たれているのが特徴である。

瓶類

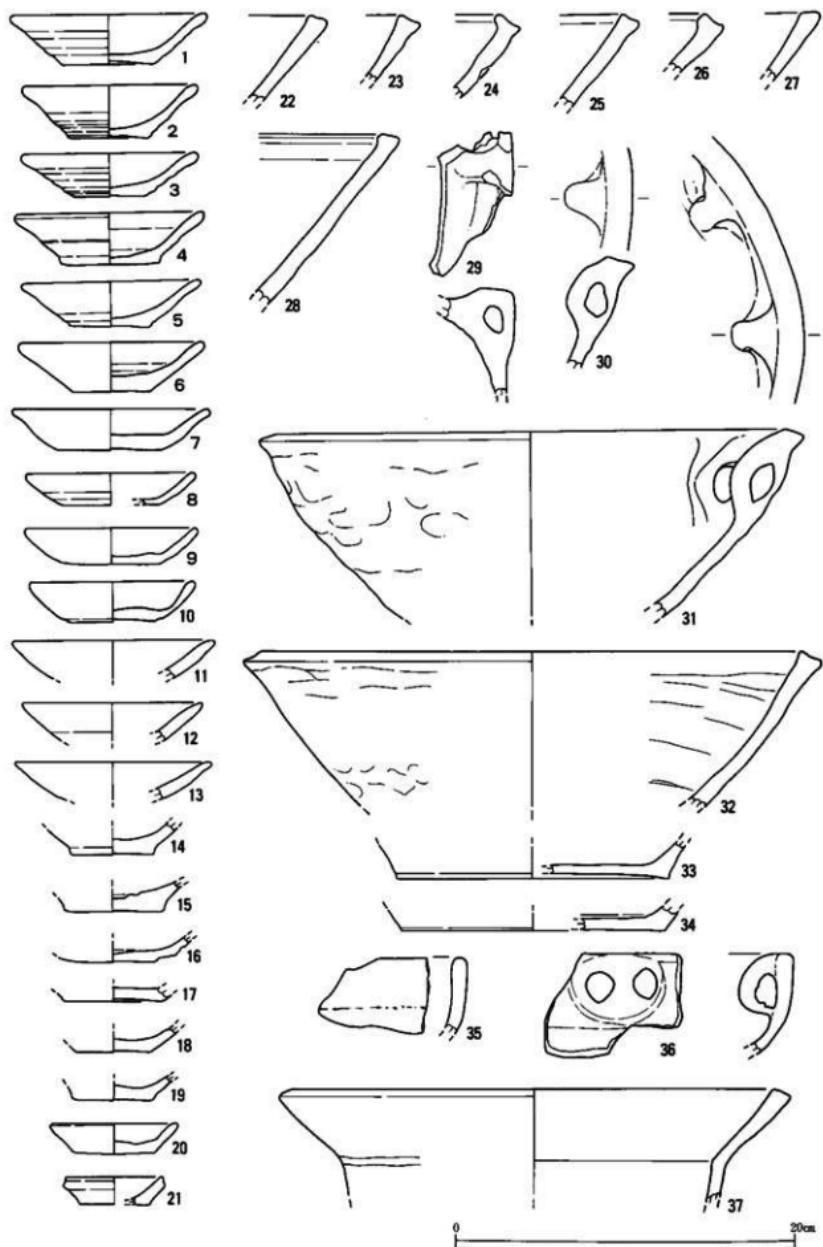
51は古瀬戸瓶子の肩部片で厚く灰釉が掛かる。肩部には5本の櫛描波状文を施す。49は古瀬戸瓶子の胴部片と考えられ、外面には灰オーリーブ色に発色した灰釉が掛かる。50は藤澤編年の古瀬戸瓶子I類の底部で古瀬戸中期様式前半（14世紀前半）と考えられる。

天目茶碗

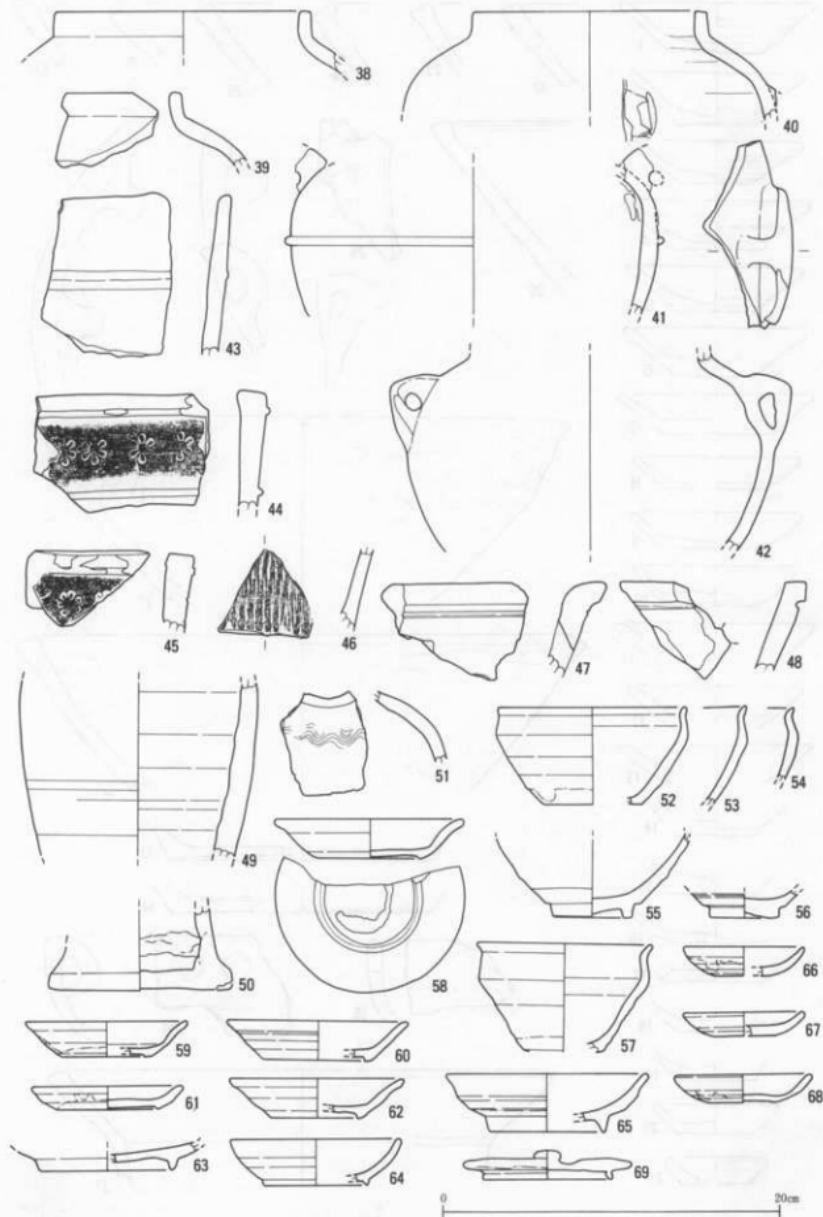
52～56は体部に鉄釉を施す天目茶碗で、56は内反高台、外面には鉄化粧を施す。藤澤編年の大窯2期（16世紀初頭）と考えられる。55は17世紀第3四半期、53は17世紀前半、54は17世紀末、57は長珪石釉を漬け掛けする白天目で、瀬戸本業焼第3小期（1650～1675）に該当する。

碗

99、100は染付磁器筒型碗、102は染付磁器丸碗、103はいわゆる広東茶碗である。85は陶器摺絵皿の小片である。時期は瀬戸本業焼編年の第6、7期（1725～1775）に該当する。74は御室茶碗で瀬戸本業焼編



第7図 カワラケ、土鍋、焙烙、土釜実測図 (1/3)



第8図 土釜、火鉢、陶器実測図 (1/3)

年の第5、6、7小期（1750年前後）に該当する。器表面には緑灰色の呉須絵を施す。器表面は全体に貫入が著しい。102、105、107はいわゆる「くらわんか手」の染付磁器丸碗である。105は胎土がやや灰色がかったり波佐見・平戸系と考えられる。107は内面釉剥ぎで重ね焼きの際に付いた高台の砂が残存している。75～76は陶器碗の底部片である。

皿

58～62は稜皿で、58、60、62は全面に鉄釉を施釉し、58の内面には三又トチン、高台裏には輪ドチの痕跡が残る。59は底部を除き鉄釉を、61は灰釉を施す。63～65は全面に灰釉を施す。貫入が見られる。いづれも瀬戸美濃系で、59は藤澤編年の大窯2期又は3期、60は大窯2期、61は大窯4期に該当する。63は大窓1期か2期（15世紀末から16世紀初頭）、65は17世紀末から18世紀前半にかけてのものである。

灯明皿

66～68は鉄釉灯明皿で底部周辺の釉は拭い取られている。66、68の胎土は褐灰色で極めて緻密である。時期は18世紀の後半ぐらいであろうか。

蓋

69は美濃産の上面に鉄釉を施した短頸壺の蓋で、17世紀の登窯製品である。

香炉

104、105は陶器香炉で、105は瀬戸本業焼香炉Ⅲ類に該当し、時期は第4、5小期（1675～1725）になる。口縁部から外面の立上がり部まで厚い鉄釉を掛けているが、二次的にキセルの灰落としとして使われたため、口縁端の釉薬が敲打により剥落している。104は輻轂半筒型で、立ち上がり部ではなく底部に3足の足が付く。釉薬は灰釉である。時期は17世紀末ころである。

片口

103は瀬戸美濃系の陶器片口の口部分であるが、緑色釉の上に透明釉を掛ける。

徳利

101は磁器徳利の底部破片と考えられるが、内面は無釉でザラザラしていて、胎土からは産地は特定できない。

猪口

96は肥前系の染付磁器猪口である。時期は19世紀代と推定される。

鉢類

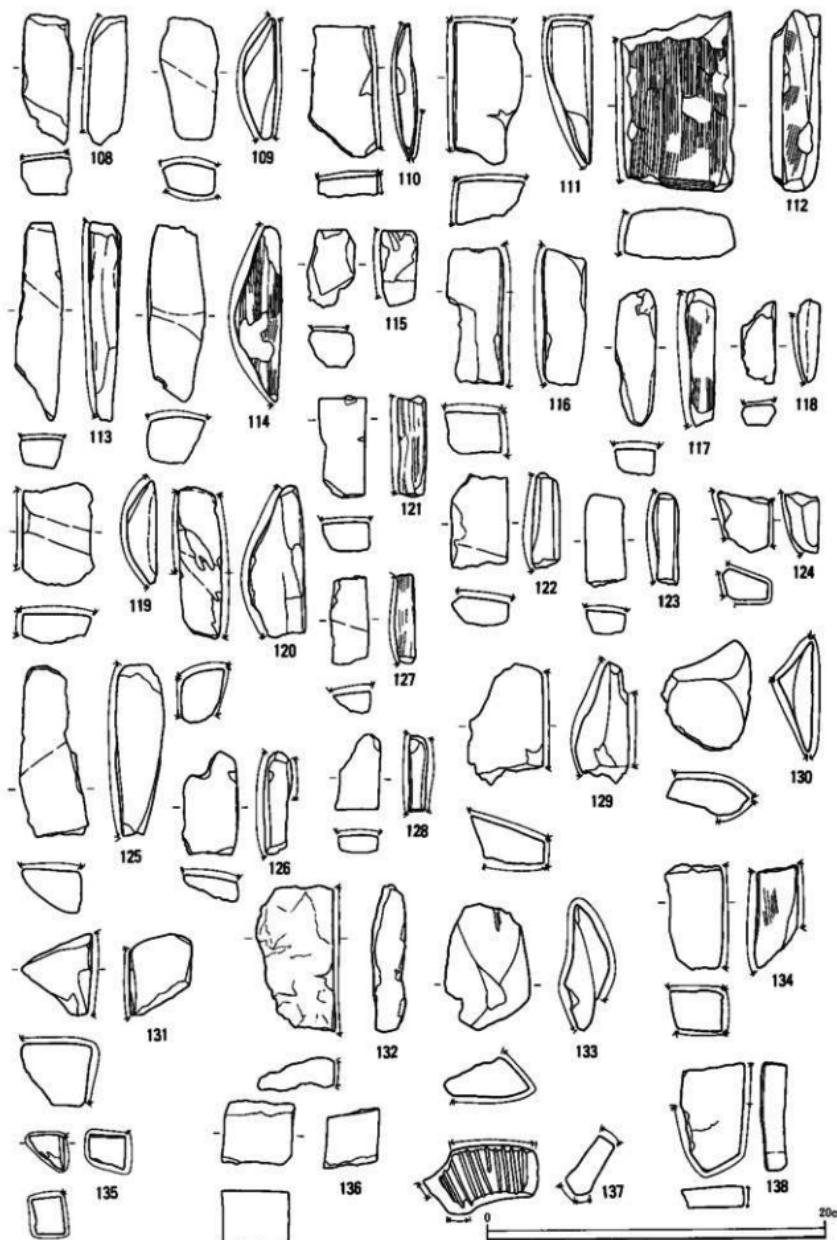
70～82は擂鉢で、78は在地産でそれを除いてすべて瀬戸美濃系である。77は瀬戸本業焼第II段階6小期（1725～1750ころ）に該当する。76は第III段階8～9小期（1800ころ）になると考えられる。73は第II段階5小期（1700～1725ころ）に該当する。70、71は鉄釉、72～77は銷釉である。83、80、81は軟質である。83は在地産と考えられる鉢で、胎土中には直径2mm以下の大粒白色砂粒を多量に含み、灰白色を呈する内面は使用によりかなり磨滅している。84～88は肥前唐津系鉢類で胎土は赤褐色で緻密である。白化粧土を施し、透明釉を掛ける。外面は鉄釉を刷毛塗りする。18世紀代のものである。107は瀬戸美濃系鉢で、内面には櫛描による平行沈線が、全面に黄瀬戸釉が掛けられ、綠釉が流し掛けられている。釉剥ぎ痕も残る。

石製品

160は粘板岩製の硯の破片で、幅4cm（1寸5分）の小型のものである。右側のクリとオカの部分の半分が欠損している。161は一体成形の小型宝鏡印塔の相輪、笠、塔身部分で、石材は銚子石（砂岩）である。



第9図 陶磁器実測図 (1/3)



第10図 砥石、陶器転用砥石実測図 (1/3)

残存高17.7cm、軒幅13.7cmで、隅飾り突起は小型で直線的に外傾する。上部に段形を刻む塔身のいわゆる「下縦型宝篋印塔」と考えられる。時期は池上編年のⅢ段階に相当し、15世紀末ないし16世紀初頭に位置する。108~138はすべて砥石である。かなり使い込まれているものが多い。また、一部には幅の狭い櫛歯状の工具痕が幾筋もつけられているものがあるが、これはすべて近世のものである。研面が凸型、つまり中央部が山形に高くなっているものは、用途は鎌砥で、手に持って使う提砥と考えられる。136はほとんど未使用で両端が欠けているが、近代以降のものである。石材は108~134までが凝灰岩質（流紋岩か）である。特に図示していないが、火打ち石と考えられる石片が10点出土している。白色又は薄い灰色の石英質のものですべて稜線が細かく打ち砕かれている。最も重いもので27g、最も軽いもので13gある。

陶器転用砥石

138は常滑の壺片を転用した砥石である。137は産地不明の陶器擂鉢転用の砥石で、断面を研面として使用している。

小金銅仏

小金銅仏（139）が出土したのは、第2地点の本調査拡張範囲の東端になる。出土層位は現表土直下の暗灰色砂質層中で、35、91、100、121等の近世遺物と同一遺構から出土している。

四天王は仏教世界の中心にそびえ立つ須弥山の中腹に住み、それぞれ東方を守護する護法神の持国天、南は增長天、西は広目天、北は多聞天として、仏教寺院では通常本尊を中心として、須弥幢の四方に配される。ちなみに、北方の多聞天は古くから単独で造られることが多く、その場合は毘沙門天と呼ばれる。

この像は右手を腰に当て、左手は挙げているようだが、左肘より上が欠損しているが、このスタイルは一般的に、持国天と考えられる。

持国天の役割は国土を護持し、衆生を安ずることであり、そのため持国天と名付けられる。左手の持物は推定するしかないが、戟と考えるのが妥当であろう。

詳細に見ると宝髻や天冠台、肩当、天衣、裳、袴、沓などの表現は細かく、広袖や幡袖は躍動感がある。小金銅仏は全体にデフォルメされた作品が多い中にあって、プロポーションは等身像に近い。全体的に磨滅はほとんど見られない優品である。製作年代は鎌倉時代と考えられる。



第11図 小金銅仏実測図 (1/1)

表2 小金銅仏観察表

法量(単位 重量g その他mm)				品質構造
重量	31.8			鉄鋼一鉄 蝶型 ムク 湯口は像底か(はつきり確 認できない) 鍍金有り
総高	44.5	面張	5.6	台座高 5.5
像高	36.8	面奥	6.9	台座幅 16.4
要際高	31.2	胸奥	7.7	台座奥 13.7
頭～頸	10.2	腹奥	9.5	底座幅 22.0
要際～頸	5.2	裾張	16.7	底座奥 15.0
耳張	7.2	足先開	9.9	

金属製品

青銅製のキセルのラウ、鉄釘等が出土している。

イ 確認グリッド出土遺物

路線調査区の最も南側に設定したTP80及び隣接するTP200からは18世紀末から19世紀代の土器、陶器、磁器、木製品がまとまって出土している。18世紀代の遺物でほぼ終了する第2地点とは対照的である。遺構は伴わない。その他TP73からは漆器椀、TP206からは栓状木製品、TP2からは鉄製容器の口縁部片と鉄滓と融着した寛永通宝が出土している。

碗類

141は染付磁器筒型碗、142は染付磁器小碗で、胎土は灰白色で黒色微粒子を少々含む。143は陶胎の磁器模倣廣東碗で、胎土は灰白色でカリカリした感じである。140は陶器碗で、淡い黄色の光沢釉が掛かり、貢入が認められる。156は染付磁器半球形碗で、胎土は灰白色である。142、141、156は肥前系、143、140は瀬戸美濃系である。

徳利

145、151は磁器徳利である。158は陶器徳利で外面には厚く飴釉を掛けた。145は肥前系、151、158は产地不明である。

鉢

144は陶器鉢類の底部で、トチンの痕跡の中央に打ち欠かれた跡があり、植木鉢として二次利用されていた可能性がある。瀬戸美濃系と考えられる。154は、染付磁器鉢の口縁部片で、内面に蛸唐草文を描く。肥前系である。

蓋

146は染付磁器蓋で焼継ぎ痕が認められる。肥前系と考えられる。

皿

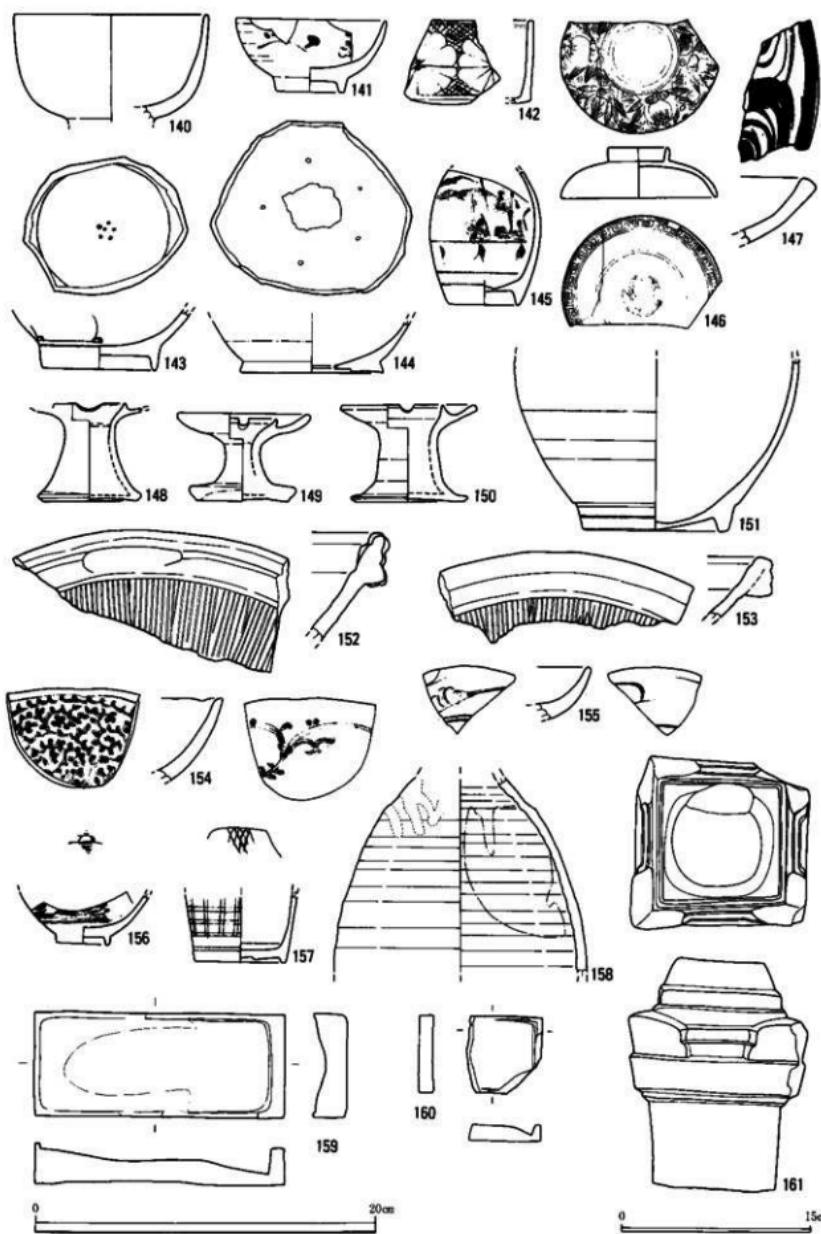
147は瀬戸美濃系の馬目大皿の口縁部片である。155は肥前系の染付磁器皿か鉢である。

灯明具

148～150は立敷形の陶器灯明皿(受皿)である。148は油溝が半月状で、棧の先端は無釉だが、全体にオリーブ灰色釉を掛けている。胎土は緻密で、灰白色を呈する。また、貢入が見られる。150のみ内面底部まで釉が掛かる。いずれも信楽産と考えられる。

壺鉢

152、153は陶器壺鉢の口縁部破片で、152には浅い注口が付く。器表面には薄く自然釉が付着する。鉢



第12図 陶磁器、鏡 (1/3)、宝幢印塔 (1/4) 實測図

目は全く彫り減っていない。いずれも壠産と考えられる。

猪口

157は肥前系の染付磁器猪口である。

石製品

159は粘板岩製の硯で、オカの部分がウミに向かって細長く著しくすり減っている。左右のヨコブチは中央付近で欠損している。幅6.2cm(2寸)、長さ15cm(5寸)である。

下駄

下駄は3点出土しているが、図示できたのはそのうちの2点であった。162は連歯下駄で約半分が遺存している。台部の形状は隅の丸い長方形を呈し、歯は台部に対して踵側によっており、後歯は後部がなだらかに傾斜している。また、歯部と台部との境は緩やかに削り出されている。前鼻緒穴は台部のほぼ中央に位置するものと思われ、後鼻緒穴は台部の後方に位置する。いずれの穴も錐などの工具によって開けられたものである。台長23.4cm、台幅現存6.3cm、復元幅11.0cm、台部厚さ1.5cm、前歯幅4.4cm、後歯幅7.0cmを測る。前鼻緒穴の径1.0cm、後鼻緒穴の径0.9cm、前鼻緒穴から後鼻緒穴までの垂直間隔は13.2cmを測る。

163も連歯下駄で3分の2が遺存している。台部の形状は小判型を呈している。歯は台部の中央部分に付き、後歯は踵方向になだらかに傾斜している。また、歯部と台部との境は緩やかに削り出されている。前鼻緒穴は台部のほぼ中央に位置しており、使用による磨耗がはげしく穴の開けなおしが行われている。後鼻緒穴は歯の側面部分から台表面にかけて斜めに開けられている。いずれも錐状の工具によって開けられている。また、前鼻緒穴付近には足の指による磨耗が認められる。台長20.5cm、台幅現存8.0cm、復元幅11cm、台部厚さ1.2cm、前歯幅5.6cm、後歯幅6.0cmを測る。前鼻緒穴の径は1.5cm、後鼻緒穴の径は1.4cmで、前鼻緒穴から後鼻緒穴までの垂直間隔は12.2cmを測る。162、163ともにTP80の出土である。これら2点の下駄は、いずれも前鼻緒穴が台部の中央に位置していることや、台長に対する前鼻緒穴から後鼻緒穴までの垂直間隔が長いことなどの特徴から近世以降の所産になるものと考えられる。

折敷

164は折敷の底板である。四隅を切り落とした四角形を呈しており、内外面には黒漆又は柿渋と思われる塗料が塗布されている。また、側面には側板を止めるための竹釘が3か所打たれている。長さ25.5cm、厚さ0.6cmを測る。TP80の出土である。

容器底板

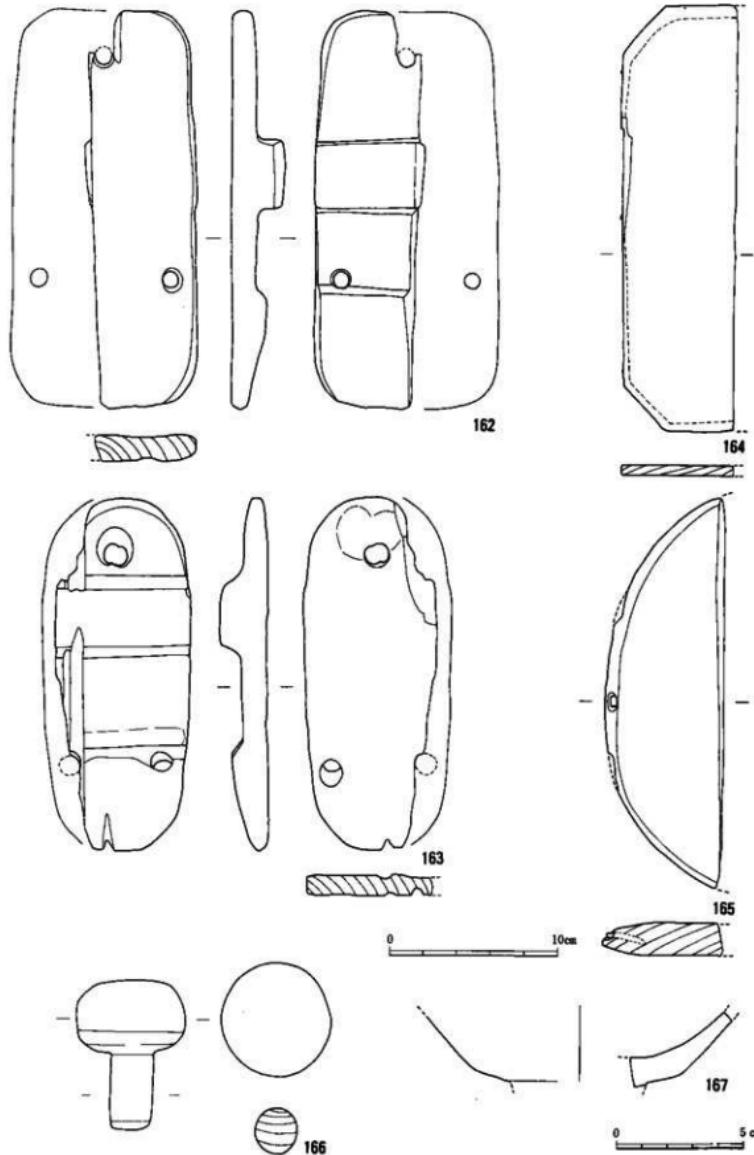
165は円形になる曲物の底板である。半欠損品で、側面には側板を止めるための木釘が1か所打たれている。長さ22.9cm、厚さ2.0cm、木釘の長さ2.4cm、厚さ0.3cmであった。TP80の出土である。

栓状木製品

166は徳久利などの栓として使用されたものと考えられる。丁寧に研磨されていて加工痕などは認められない。全長は5.8cmで、このうち栓頭部長は2.9cm、軸部長は2.9cmであった。幅は栓頭部分で4.4cm、軸部で1.7cmを測る。TP206の出土である。

漆器椀

167は高台付の漆器椀である。遺存状態は極めて悪く、木質部は腐り漆膜の剥落も著しい。胴下部のみ残存している。外面には赤漆、内面には黒漆が塗布されている。高台部分での復元径は5.5cm、残存高は3.0cm、厚さ1.0cmを測る。TP73からの出土である。



第13図 木製品実測図 (1/3、1/2)

III まとめ

1. 中近世の横須賀

前述したように「千葉県八日市場市埋蔵文化財分布地図」によれば、今回の路線の調査地点は横須賀城西側外縁を南北に横切る。また、元禄8年（1695）「横須賀村絵図」から、長徳寺棟家の山崎貞幹氏は、長徳寺の西に慈眼院が、またそれに接してさらに西に西蓮院が当時所在していたと推定している。慈眼院は横須賀字荒場にあり、本尊は觀世音菩薩、西蓮院は横須賀字御房内にあり、本尊は薬師如来であった。この両寺は長徳寺門徒寺として安永9年（1780）6月の長徳寺「人別御改帳」に記載されているが、ともに江戸時代後期から明治初年にかけて廃寺となっている。（「八日市場市史」）。第2地点はこの慈眼院と西蓮院との境界に位置することになる。したがって、中世以降にあっては横須賀城外縁、又は寺院間の境界に当たると推定される地点である。

ここで長徳寺、横須賀城に関わる伝承・経歴をまとめてみる。

延久2年（1070）～承保元年（1074）	地藏堂創建
養和元年（1181）	横須賀城、地藏院、慈眼院、文殊院等焼失
文治年間（1185～1189）	長徳寺、慈眼院を現在の位置に再建
明徳年間（1390～1393）	横須賀城占領、長徳寺無住（焼失？）
応永23年（1416）	横須賀全村焼討ち 長徳寺焼失
応永29年（1422）	長徳寺再建
江戸末期から明治初年	慈眼院、西蓮院等廃寺となる

これらの出典はいわゆる伝承といわれるもので、史実とは認められていないものが含まれるが、ここではこれらを参考にしながら遺跡の歴史をたどっていきたい。

調査地点の出土遺物は14世紀前半から18世紀末までのものであり、遺物量の多少はあるもののこの間はほとんど断絶は見られない。12世紀から13世紀代の遺物は出土していないので、文治年間の再建伝承については実証できない。

最も古い遺物は14世紀前半に生産された古瀬戸瓶子で、これは優品として伝世する可能性の高いもので、寺院跡から出土する可能性のある遺物である。調査で確認された最も古い遺構は、14世紀後半から15世紀代にかけてのカワラケを出土した直径3mの大型土坑2基である。この土坑の性格は、井戸又は少々大きいが墓坑と考えられる。調査区からは同時期の板碑片が出土しているので、この時期既に墓域になっていたものと思われる。

16世紀には掘立柱建物が建てられ、沼地との境界には柵が設けられた。また、同時期の宝篋印塔が出土していることから、引き続きこの時期も墓域であった可能性が高い。このことから、この掘立柱建物は寺院もしくは草堂のようなものであった可能性がある。16世紀代の遺物はかなり少なく、16世紀中ごろで見られなくなるが、伝承によれば16世紀代には長徳寺が押田氏の庇護のもと繁栄していたと言われている。したがって、これらは直接には寺院や周辺の村落に伴うものと推定される。横須賀城は戦国末期には押田氏の領有する城であったとされるが、16世紀後半の遺物がないことから、押田氏やその家臣団はより防御

に適した八日市場城にその本拠を構えていたと考えるのが妥当であろう。

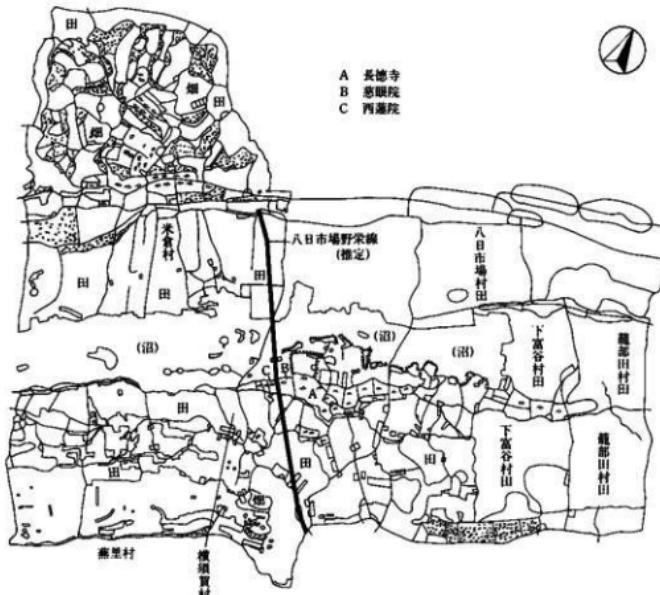
17世紀の遺構では、路線に並行するように数条の溝が検出されている。この時期には既に城としての機能は失っていたであろうし、城跡に伴う堀としてもまた規模が小さすぎるので、屋敷（寺院）内の側溝か、屋敷間の区画溝のように考えられる。土器・陶磁器類の大半を占めるのが18世紀代の近世遺物である。しかし、それらはいわゆる日常雑器類がほとんどで、寺院に直接関係するものは、18世紀代の陶磁器類と伴出した小金銅仏（鎌倉時代製作）を除いて見られない。

近世には、横須賀は実体として長徳寺とその末寺、そしてそれを取り囲むような集落というほとんど現在の様子と変わらない状況であったろう。さらに、19世紀に入ると第2地点ではほとんど遺物が出土しなくなる。慈眼院、西蓮院両寺は、江戸末期から明治初年にかけて廃寺となつたと言われるが、江戸後期には衰退し、18世紀末には廃寺か廃寺同然になつたものと推定される。第1層はその廃寺の際の整地層と考えられる。第1層は廃寺と関連させることができたが、出土遺物から2層及び3層は15世紀末期から17世紀代の幅の中で捉えなければならない。14世紀末から15世紀前半に2度の大きな災害にあってはいるという伝承とは対応しないという結果となった。

2. 小金銅仏について

県内出土の小金銅仏・神像の分布及びその出土状況は第15回、表3のとおりである。

古代においては関東地方特に栃木、群馬、千葉県にその数が多く、しかも、古代寺院の周辺から出土す



第14回 元禄8年（1695）の横須賀村絵図（横須賀・山崎貞幹家蔵）と八日市場野宋線（推定）（約1/30,000）

る事例が多いことから、同地域における古代仏教文化の濃密な浸透があったことがうかがわれる。

一方、中世に製作された仏像は、塚から出土する例とそれ以外のものに分かれるようである。表3の14などは仏像が中世まで伝世して、塚に埋納された可能性が強く、これもまた前者の例に当てはまるようである。この場合は何かを祈願して埋納されたものであろう。後者は出土状況がはっきり分からないものを除けば、表土層から偶然に出土していることが多い。

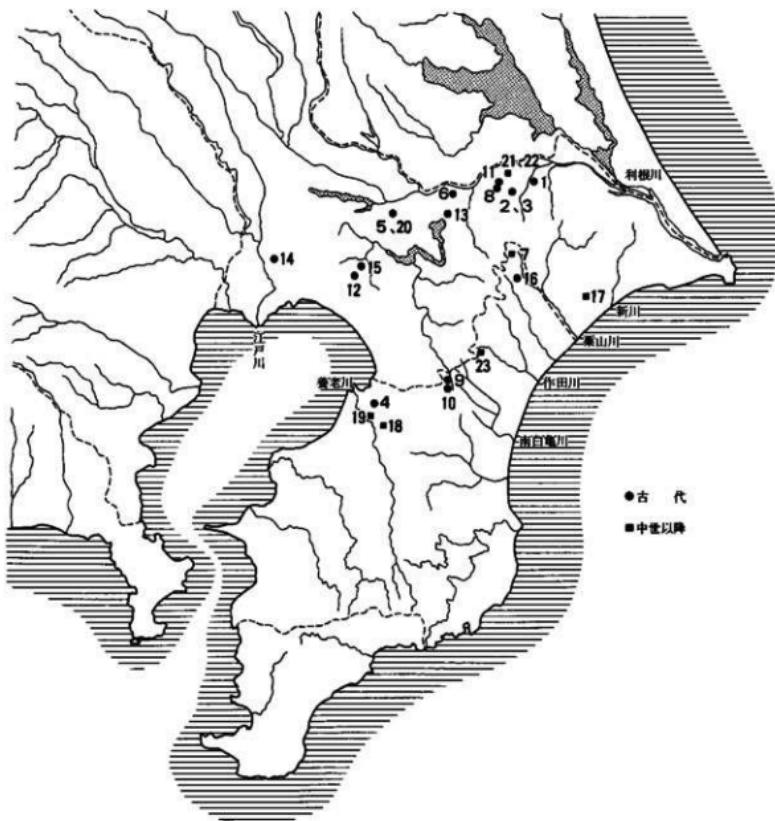
仏像ではないが、県内では神崎町武田経塚や成田市天王船塚11号塚などで、墳丘頂部から経筒が出土している。この時期の経塚は現世利益や追善供養のために埋納されたもので、埋納時期は出土経筒から16世紀代であることが分かっている。一つの課題として埋納された仏像とこれらの経塚遺物との関連を考えていく必要があろう。

小金剛仏は、大きさから言って大寺院などの本尊として用いられる事はないと思われる。恐らく寺内にあっては僧侶が起居する自房に安置されたり、草堂のような簡単なお堂の本尊であったり、寺外にあつては貴人の住宅の仏間に安置された念持仏とされたものと考えられる。また、中世以降には、武将が醫仏と称して髪に結びつけたり、兜の中にごく小さな仏像を置いたりする例や、旗印の先につけたとか、懷中守りにしたという伝承を持つものもある。仏像周辺や同一層から出土した遺物が18世紀代のものであることを考慮すると、寺院に安置されていたものが、江戸後期の廃寺の際に当時の雑器類とともに廃棄されたものと推定される。

いずれにしろ、今回の出土例は中世城館・寺院周辺から出土したこと、それらとの密接な関係をうかがわせる好例である。

表3 県内出土小金剛仏・神像一覧

番号	神・仏像種類	制作年代	出土 地 点・出 土 状 況	法 量 (mm)	文 獻
1	押出一光三尊像	白鳳(7C後半)	佐原市閑字峰崎の峰崎横穴群3号横穴の棺床面に寄着して出土	総 高 169	1
2	十一面觀音菩薩立像	奈 良	香取郡大宋町福山の畠	復元高 162	2
3	十一面觀音菩薩立像	奈 良	同 上	(三片よりなる断片)	2
4	如 来 坐 像	不 詳	市原市国分寺北辺部	像 高 32.5	14
5	菩 薩 立 像	平 安	印旛郡印西町木下別所魔寺	総 高 53.2	3
6	菩 薩 立 像	平 安	印旛郡荣町北辺田大天神社境内	総 高 233.0	14
7	觀 音 菩 薩 立 像	平 安	山武郡芝山町坂志園・尼ヶ谷遺跡 表上層中	総 高 147.3	4
8	神 坐 像	平 安	香取郡下総町名木魔寺	総 高 41.3	3
9	男 神 立 像	平 安	千葉市土気南遺跡群小山遺跡	総 高 31.5	14
10	男 神 立 像	平 安	千葉市土気南遺跡群後第1遺跡	総 高 54.5	14
11	菩 薩 立 像	平 安	香取郡下総町名木地先の畠	総 高 101.6	3
12	如 来 立 像	平 安	八千代市高津新山遺跡表上層中	総 高 68.3	14
13	如 来 坐 像	平 安	印旛郡荣町龍角寺地先(放光院跡) 地表下50cmの所	像 高 81.0	5
14	誕 生 釈迦 佛 立 像	平 安	市川市下総国分寺付近の水田中の塚(富貴塚)	総 高 108.9	6.7.8
15	宝 冠 如 来 坐 像	平安後期	八千代市井戸戸前遺跡7号住居覆土中	総 高 52.3	9
16	宝 冠 如 来 半 像	平安後期	山武郡芝山町田向城跡土壤中	総 高 69.3	10
17	持 国 天 像	鎌倉	八日市場市大眾・塔ノ前遺跡の近世遺物包含層中	総 高 44.5	
18	阿 弗 陀 如 来 坐 像	鎌 倉	市原市福増字楊橋付近	像 高 51	11
19	天 部 立 像	鎌 倉	市原市村上天神台遺跡	像 高 40	11
20	地 藏 菩 薩 立 像	室 町	印旛郡印西町石上の畠、木下魔寺付近	総 高 55.3	14
21	鋼 板 線 刹 仏	南北朝	香取郡神崎町神崎宿字谷津地先、古墳墳頂部につくられた0.98m×0.89mの楕円形プランの土坑覆土中	脇侍高 65	12
22	鋼 製 壇 觀 音 立 像	南北朝	同 上	総 高 82	12
23	增 長 天 像	鎌倉～室町	東金市南小野町小野遺跡(D区) 小野1号墳主体部埋土中	総 高 21.5	13



第15図 千葉県内小金銅仏・神像出土分布図

文 献

- 1 原田享二ほか 『佐原市内遺跡群発掘調査概報Ⅱ』 佐原市教育委員会 昭和62年度
- 2 平野元三郎 『千葉県上代仏教文化史資料録』『千葉県の歴史』第3号 千葉県 昭和47年
- 3 『古代東国の大聖・仏教文化の夜明けをさぐる』埼玉県立博物館 昭和57年
- 4 『平成4年度芝山町内遺跡発掘調査報告書 小池麻生遺跡、坂志岡・尼ヶ谷遺跡』芝山町教育委員会 平成5年
- 5 林 宏一 『古代東国的小金銅仏・出土仏を中心にして』『歴史手帳』10巻10号 名著出版 昭和57年
- 6 『古代の誕生仏』奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 昭和53年
- 7 田中 義恭 『誕生仏』『日本の美術』第159号 至文堂 昭和54年
- 8 『誕生佛造像』倉吉博物館 昭和63年
- 9 『八千代市井戸向遺跡』千葉県文化財センター 昭和63年
- 10 中野 修秀 『田向城跡』財団法人山武都市文化財センター 平成5年
- 11 『市原市内仏像彫刻所在調査報告書 - 北部編 - 』市原市教育委員会 平成4年
- 12 荒井世志紀 『谷津遺跡』財団法人香取都市文化財センター 平成7年
- 13 『財団法人山武都市文化財センター年報No.9 - 平成4年度 - 』平成6年
- 14 『魅る光彩 - 関東の出土金銅仏 - 』埼玉県立博物館 平成5年

付章 八日市場野榮線 大堺・塔ノ前遺跡ボーリング調査報告

パリノ・サーベイ株式会社

はじめに

八日市場市周囲に広がる沖積低地には、現在の海岸線と平行する砂堤列が10列以上も見られ、その上に砂丘が形成されている。また、砂堤と砂堤の間は堤間湿地となっており、現在では水田として利用されているが、聞き取り調査によれば、かつては沼地だったところも多かった様である。これらの地形は、いずれも繩文海進以降の海退に伴い形成されたものであるが、その形態や形成時期から大きく3つの砂堤に区分される（森脇、1979）。大堺・塔ノ前遺跡は、このような砂堤・堤間湿地に立地する遺跡である。発掘調査は砂堤列に直交して確認調査グリッドが設定され、その結果、3地点で本調査が行われた。本調査地点は北から第1地点・第2地点・第3地点とされた（図1）。森脇（1979, 1986）の地形面分類図に基づくと、第1地点・第3地点は堤間湿地に立地し、第2地点は第I砂堤群上に立地する。第1地点では、泥炭層と青色砂層との間の層準から繩文時代後期に属する土器片（安行II式期）が検出されており、第2地点では中・近世の遺構・遺物が検出されている。

平成4年9月、財団法人千葉県文化財センターから、本遺跡周辺の地形発達史解析と堆積層の層序対比を目的としたボーリング調査の実施依頼が当社考古学研究室にあった。そこで当社考古学研究室技師（2名）が現地踏査を事前に行い、千葉県文化財センターと協議の上、上記の調査目的・方法を確認した。

ところで、採取されたボーリングコアの肉眼による層相観察からのみ層序対比を行うことは危険であり、正しい層序対比とはいえない。堆積層の形成過程（堆積年代や古環境）を検討した上で確立することが必要である。今回はボーリング調査成果について報告するが、遺跡周辺地域の地形発達史に関する研究成果及び発掘調査成果を考慮した。各地点間の層序対比については、今のところ堆積年代や古環境の解析資料が不充分なため、大まかである。次の調査段階として、得られたボーリングコアを分析試料とし、堆積年代、水域環境、植生等古環境復元調査解析が必要と考える。

以下に、ボーリング調査成果について述べる。

1. 調査地点及び調査方法

ボーリング調査地点として、合計8か所（A地点・B地点・B'地点・B''地点・C地点・D地点・D'地点・E地点）の地点を設定した（図1）。ただし、先に述べたように、C地点は砂堤のため手動ボーリング調査に不向きであると判断したので、調査区内で深掘りを行い、層相の土層断面観察を行った。他の地点にて使用したボーリング機器は泥炭試料採取に適し、かつ今後検討されている自然科学分析調査にも対応できるように、試料採取量の多いシンウォール型サンプラーを用いた。特に、A地点では、試掘調査の所見から泥炭層が最も厚く堆積していると予想されたため、遺跡付近の堆積層の模式的な場所となりうると考えられた。したがって、より深部での調査を行う必要性が生じたために、層相が砂質に変化した後でも調査が可能なトマス型サンプラーを併用してボーリング調査を進めた。

2. 調査結果

各ボーリング調査地点の模式柱状図と層相を図2に示した。以下、各地点ごとの土層の堆積状況について記す。

・ A 地点 (標高6.4m)

標高3.9mより下位では淘汰の良い砂層（中粒砂～粗粒砂）が発達する。その上層には、層厚が約2mの泥炭層が堆積する。なお、泥炭層は上部及び下部では砂質になっており、下部では分解が進んでいる。発掘調査区内（第1地点）では、泥炭層の下部から縄文時代後期（安行Ⅱ式期）の土器片が出土しているほか、泥炭層の中・下部から多くのヒシやオニビシなどの種子が検出される。なお、ボーリング試料中からも泥炭層中・下部においてヒシ属の種子の破片が検出される。標高6.0mよりも上位では、現代の水田耕作土である。

・ B' 地点 (標高6.5m)

A地点で見られたものとはほぼ同質の砂層は、標高6.0mよりも下位で認められる。その上位は薄い砂混じりの泥炭層を挟んで現代の水田耕作土である。

・ B'' 地点 (標高6.4m)

A地点で見られたものとはほぼ同質の砂層は、約5.5mより下位で認められる。その上位の泥炭層は約80cmの厚さがあり、他の地点と比較してやや砂質である。その上位は現代の水田耕作土である。

・ C 地点 (標高6.5m)

A地点で見られたものとはほぼ同質の砂層は、約4.7mより下位で認められる。

・ C 地点 (標高7.4m)

現地表面から深度約1.7mまで深掘りを行い、堆積層の層相記載を行った。本地点は、これまで最下部層で見られたものと粒径がほぼ同じ砂層からなるが、色調や腐植の度合いにより層相が細分される。標高6.6mより下位では、これまでみられたものとほぼ同質な砂層が見られる。本層は色調によりさらに2分されるが、これは地下水位などによる酸化鉄の沈着など二次的な影響が高いと思われる。標高6.6m～7.1mまでは、腐植を含み、黒っぽい色調の砂層となる。その上約15cmは下部と同じような腐植が混じっているが、黄褐色の砂が不規則に入り、攪乱されているように見える。中世の遺構を埋めている砂層である。その上約15cmは現代の擾乱土である。

・ D 地点 (標高6.4m)

他地点で観察される基底の砂層は標高6.2mより下位にあり、その上位は現代の水田耕作土になる。

・ D' 地点 (標高6.4m)

D地点とはほぼ同様な層相を呈する。

・ E 地点 (標高6.6m)

他の地点で観察される基底の砂層は約6.0mより下位にあり、その上には約20cmの厚さで腐植を多く含む砂質シルトが堆積する。その上位は現代の水田耕作土である。

3. 発掘調査地域の層序について

発掘調査地点付近の低地部の基本的な層相変化は、下位から砂層、泥炭層、耕作土へと変化する。また砂堤部では、青色～褐色の砂層、腐植混じりの砂層の順に変化する。このような層相の変化に加え、各調



図1 ポーリング調査地点と周辺の丸木舟出土地点 (1/25,000)

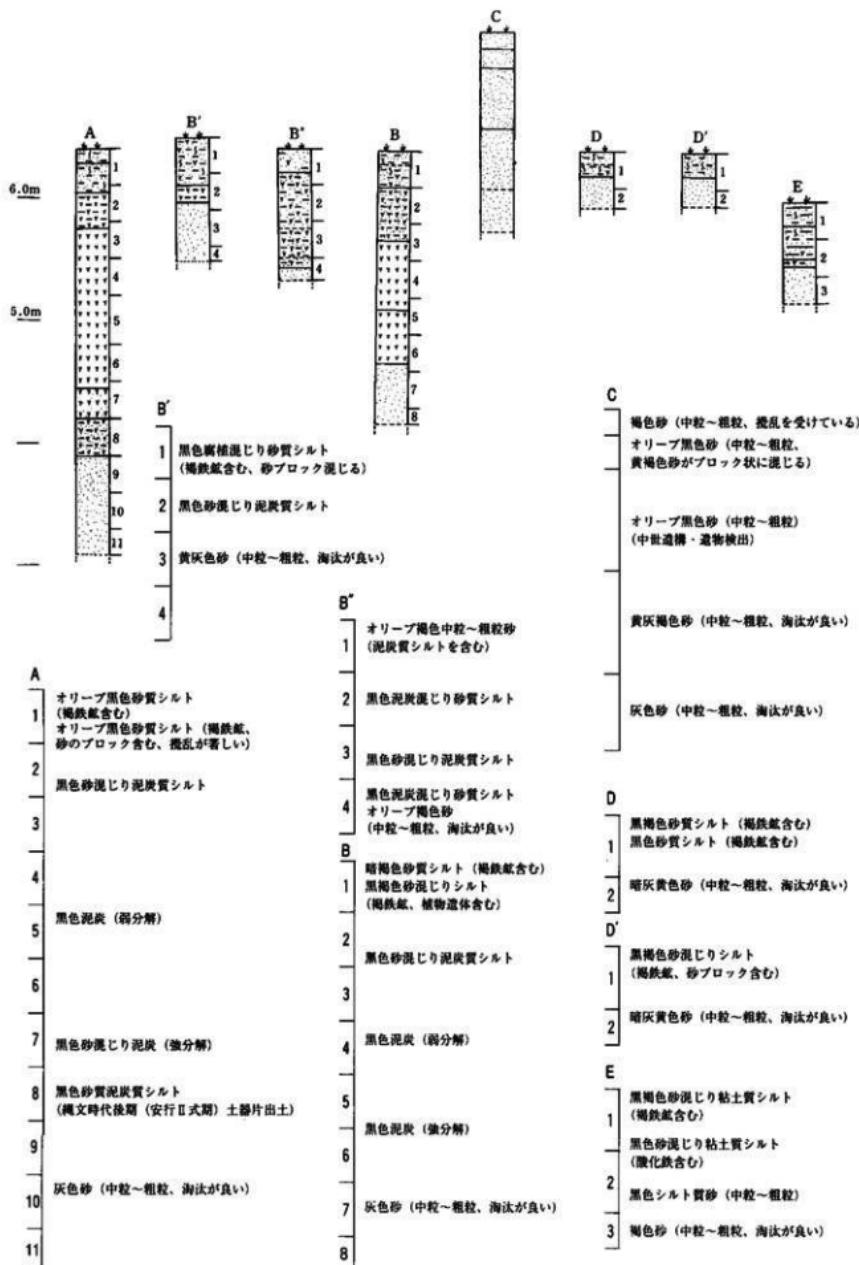


図2 各調査地点の層位

査区での遺物の状況、既存の地形・地質学的研究（森脇：1979,1986など）などを考慮にいれ、本遺跡周辺の層序について検討を行った。その結果を各地点間の層序対比図として図3に示す。以下、発掘調査地域での層序についてまとめる。

(1) 低地部

低地部では、深度が最も深いA地点を模式地として、Ⅰ～Ⅲに層序区分を行った。

・Ⅲ層

青色系もしくは褐色系の砂層で、低地部すべての調査地点の基底において認められる土層である。色調の違いはおそらく地下水位の影響による酸化鉄などの沈着など二次的なものと思われる。Ⅲ層は砂堤堆積物（森脇、1979）に対比されるものと考えられる。今回の調査では明瞭には確認できなかったが、砂堤堆積物は、その中に海生生物の生痕がみられることなどから、潮間帯～後浜の堆積物が砂堤を構成していると考えられている（Moriwaki,1977）。Ⅲ層堆積時の地形面は、砂堤（C地点）の北西にあたるA地点やB地点では大きく凹んだ形になっているが、B'地点では逆に盛り上がり、埋没した小規模な砂堤のように見える（図4）。一方、砂堤の南東側は標高6m前後で大きな起伏は見られない。形成時期は縄文海進最盛期の縄文時代前期～中期頃と思われる。

・Ⅱ層

黒色の泥炭層で、Ⅲ層によって形成された地形面の凹地に分布している。特に砂堤（C地点）の北西側で発達し、最も厚いもので約2mの厚さがある（A地点）。泥炭層が発達する北西側では、層相変化や出土遺物、地形・地質学的背景により3層に細分されるが、南東側では泥炭層が未発達で碎屑物も多く区分は難しい。形成時期は、第1地点及び第3地点の調査区からともに縄文時代後期（安行Ⅱ式期）の土器片が出土していることから、両者とも縄文時代後期以降に形成されたものとみなすことができる。Ⅱ層は、堤間湿地堆積物（森脇、1979）に対比されるものと考えられ、干潟層上部の未分解泥炭層（辻・鈴木、1976）とは同時代のものと考えられる。以下、北西側におけるⅡ層の層序区分について述べる。

Ⅱ-3層は、分解の進んだ砂混じりの泥炭層で、縄文時代後期（安行Ⅱ式期）の土器片を包含することや、森脇（1979）による堤間湿地堆積物の形成過程から考えると、Ⅱ-3層は、縄文時代後期に起きた海退の際に、砂堤が形成され内陸側が濁化したときの堆積物であると考えられる。

Ⅱ-2層は、未分解の泥炭層である。ヒシやオニビシなどの種子を多量に包含することから、池沼的環境化に堆積した泥炭層と考えられる。堆積時期については、森脇（1979）等を参考にすると、縄文時代晩期～弥生時代に堆積したものと見られる。

Ⅱ-1層は、砂質の泥炭層で、下位と比較して有機質が少ない。砂堤上では、古墳時代ころには既に砂丘（中期砂丘）が形成されたといわれている（森脇、1979）。中期砂丘は、調査区の北側に当たる八日市場市の市街地がのる砂堤をはじめ、付近に広く分布している。周囲の砂堤上の碎屑物が不安定になると、風や水などの影響によって堤間湿地内に砂などの碎屑物が多く混入することは十分に考えられる。したがって、Ⅱ-1層の堆積時期は中期砂丘の形成時期とはほぼ同じ古墳時代以降の堆積物であると推測される。

・Ⅰ層

Ⅰ層は現在の水田土壌で、褐鉄鉱を含む土壌である。

(1) 砂堤部

砂堤（C地点）は、地形分類によれば、第I砂堤群（森脇、1979）に属するものと考えられ、形成時期

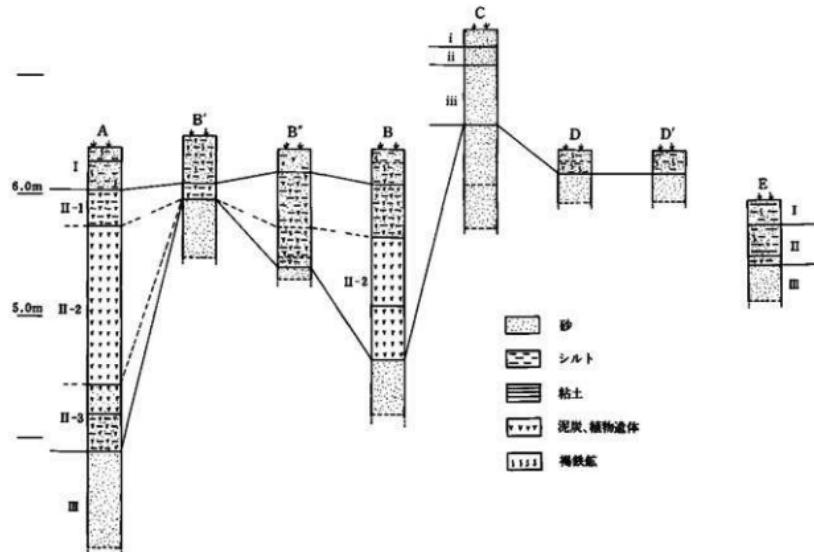


図3 地点間の層序対比図

は縄文時代前期～中期に形成されたと考えられている。砂堤を形成する砂層は、低地部のⅢ層と同一のものとみなすことができる。その形成当時は、Ⅲ層と同様な堆積物が砂堤の表層を覆っていたが、砂堤形成後に砂堤上を覆った植生により土壤化を受け、さらに人為的な擾乱などを受けて現在見られる層相に変化したものと考えられる。このようにⅢ層を母材として形成された土層をⅰ～ⅲの3層に分層した。

・Ⅲ層

腐植に富む黒色の砂層で、砂堤形成後に表層を覆った植生によって形成されたと考えられる。第Ⅰ腐植層（森脇、1979）に対比されるものとみられ、砂堤形成後まもなく腐植層の形成が始まったものと推測される。

・Ⅱ層

Ⅲ層を削って堆積した砂層で腐植に富むが擾乱を受けており、Ⅲ層と同質の砂ブロックを含む。中世の遺構を覆う土層であることから、中世以降に堆積したものと考えられる。

・Ⅰ層

Ⅱ層を削って堆積している砂層で、砾・コンクリート・ビニールなどを含むことから現在の擾乱層である。

4. 発掘調査地域の地形発達史について

発掘調査地域の地形発達史について、地形・地質学的所見や既存の結果（森脇、1979など）を参考にして各時代ごとにまとめる。

(1) 縄文時代前期～中期

縄文海進最盛期に当たる時期には、海は丘陵と平野との境目まで達していたが、その後序々に海退が進むにつれて八日市場市街地がのる砂堤が形成され、その後調査区内に砂堤（C地点）が形成された。砂堤（C地点）の上にはやがて植物が生育し土壌化が始まり（Ⅲ層）、古墳時代以降まで土壌化が続いたと考えられる。一方、堤間湿地（A地点～E地点）では、まだ海の影響を受けていた（Ⅲ層）と推測される。

(2) 縄文時代後期

海退が序々に進行するに従い、調査区の海側に新たな砂堤列（第Ⅱ砂堤列：森脇、1979）が形成されていく。そのため堤間湿地は淡水化し、砂堤（C地点）の北西部では泥炭層が発達した（Ⅱ-3層）。一方、砂堤（C地点）南東側の堤間湿地は、水深も浅く泥炭層は未発達であった。

(3) 縄文時代晩期～弥生時代

この時期は最終間氷期の中でもネオグレイシェイション（Neoglaciation）とよばれる寒冷な時期に相当し（Denton and Karlen, 1973）、日本では一般的に「弥生の小海退」とよばれる（井関、1974）。海退は急激に進行し、海岸沿いには第Ⅱ砂堤列の形成がさらに進行していった（森脇、1979）。砂堤（C地点）の北西部の堤間湿地はヒシやオニビシなどが生育するような池沼となり、泥炭層の堆積が進行した（Ⅱ-2層）。恐らく、このころからB'地点でみられた小規模な砂堤は水面下に埋没してしまったものと見られる。一方、砂堤（C地点）南東側の堤間湿地は、水深も浅く泥炭層は未発達であったものと思われる。

(4) 古墳時代以降

この時期になると、周囲の砂堤列では砂丘の形成が始まり、地表面は不安定な状態となる。ただし、C地点の砂堤については、砂堤の規模が小さいためかそのような傾向はみられなかった。周囲の地表面が不安定になったため、堤間湿地への碎屑物の供給が増加し、泥炭層に砂が多く混入するようになった（Ⅱ-1層）。一方、砂堤（C地点）南東側の堤間湿地は、水深も浅く泥炭層は未発達であったものと思われる。

(5) 中世

C地点では当時の遺構・遺物が検出されていることから、砂堤上では人間の活動が営まれていた（Ⅲ層）と考えられる。

(6) 現代

堤間湿地では水田が行われ、砂堤上（C地点）は居住域として利用されている。

5. 総 括

八日市場市は縄文時代を中心とした遺跡が多く確認されている地域であり、特に低地部の発掘調査では、土器片などとともに独木舟・木坑などの木製品類が多く検出されている。1984年に発掘調査が実施された宮田下泥炭遺跡（借当川遺跡調査会、1985）においても、縄文時代後期に相当する独木舟が検出されている。同遺跡では花粉分析・種子同定などの自然科学分析調査が実施されている。独木舟が検出された縄文時代後期の周辺地域の古環境については、アカガシ亜属が優占する植生がコナラ属・シイノキ属を伴う暖温帯林が後背の丘陵地などに存在し、低地部では浮葉植物のヒシ属やサンショウモなどが産出することから、沼地のような水域が存在したと推定している。本遺跡（第1地点）の泥炭層（Ⅱ層下部）から縄文時代後期に相当する土器片（安行Ⅱ式期）が出土している。本遺跡と宮田下泥炭遺跡は比較的近接地にあることから、本遺跡周辺の縄文時代後期の森林植生も暖温帯林であったと推測される。しかし、その詳細に

については今後分析調査を実施し検討する必要がある。また、地形発達史については、今後は本遺跡を中心として、さらに広い範囲にわたってボーリング調査などを行い、広域にわたる地形解析を実施することが重要と考えられる。

<引用文献>

- Denton, G.H. and Karlen, W. (1973) Holocene climatic variations their pattern and possible cause. Quaternary Research, 3.
- 井関弘太郎 (1974) 日本における2000年B.P. ころの海水準. 名古屋大学文学部研究論集, 62, p.1-22.
- Moriwaki (1977) The formation of sandy ridges on the Kujukuri coastal plain, central Japan. Geographical Reports Tokyo Metropolitan University, 12, p.105-116.
- 森脇 広 (1979) 九十九里浜平野の地形発達史. 第四紀研究, 18, p.1-16.
- 森脇 広 (1986) 九十九里低地. 日本の地質 3 関東地方, p.199-200. 共立出版社
- 借当川遺跡調査会 (1985) 千葉県八日市場市宮田下泥炭遺跡 - 独木舟調査 -. p.23-24.
- 辻 誠一郎・鈴木 茂 (1977) 九十九里浜平野北部の沖積世干潟層の花粉分析的研究. 第四紀研究, 16, p.1-12.

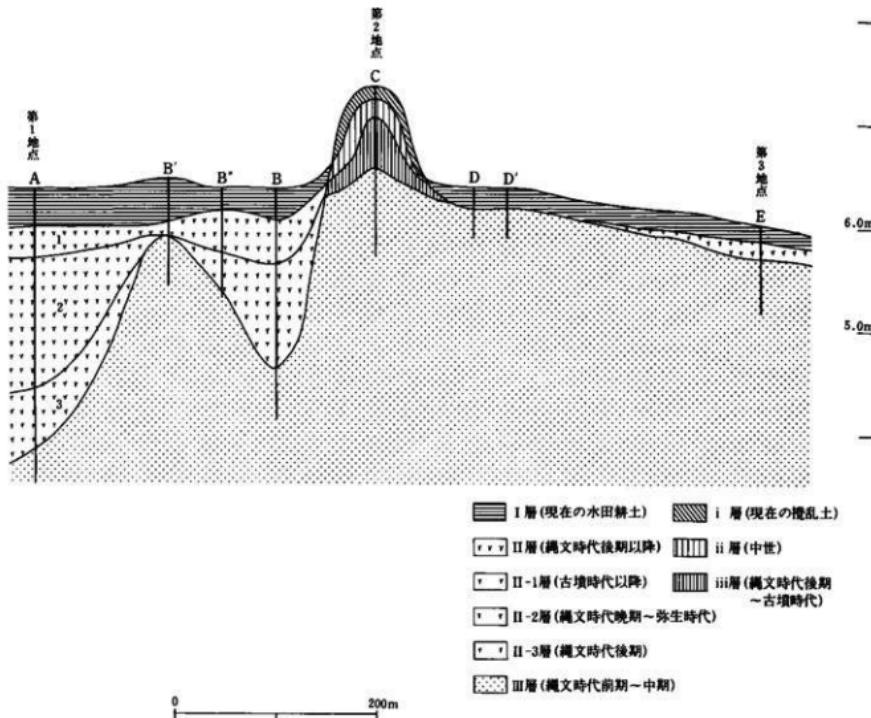


図4 調査地域の断面図

写 真 図 版



遺跡周辺航空写真 (1/10,000)

図版 2



1. 遺跡遠景



2. 確認調査実施状況（平成 3 年度）



3. 確認調査実施状況（平成 6 年度）



1. 第2地点東側



2. 第2地点西側



3. 土坑検出状況



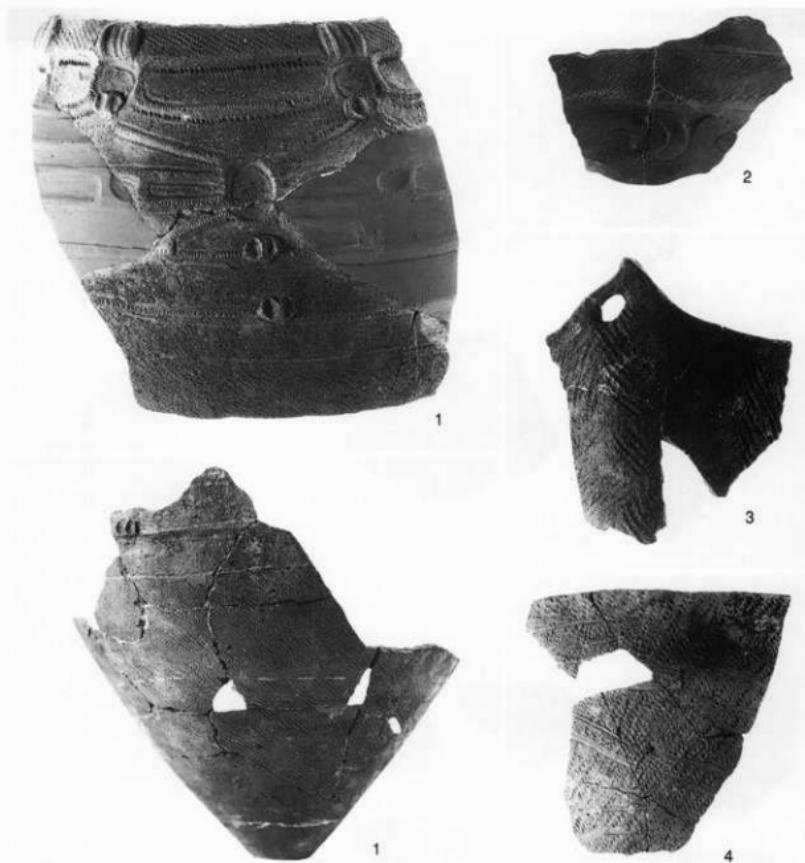
1. 第2地点遺物検出状況



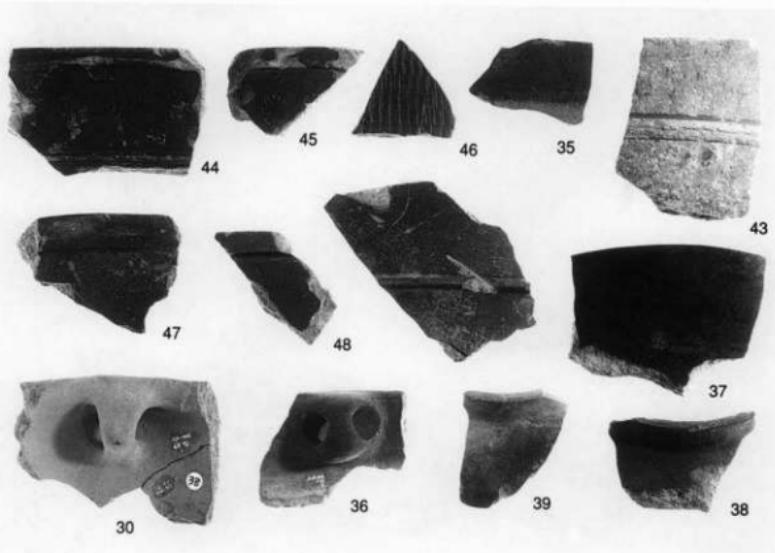
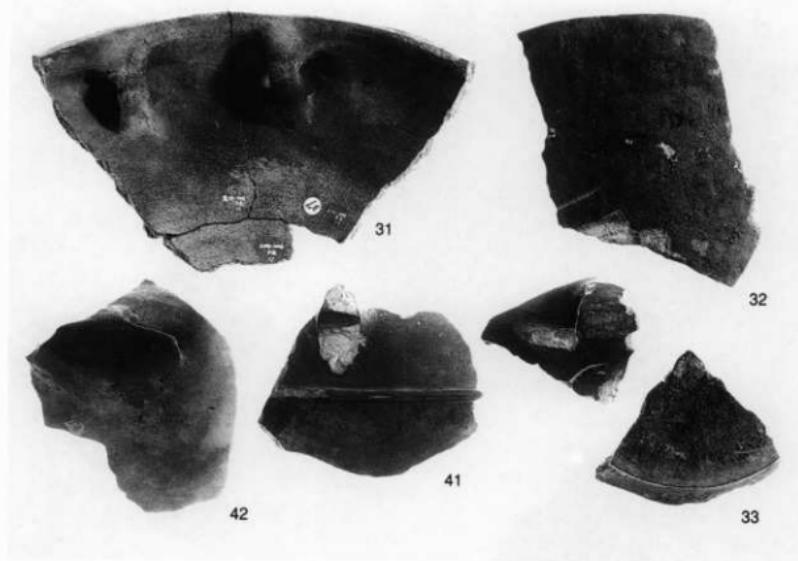
2. 第1地点遺物出土状況



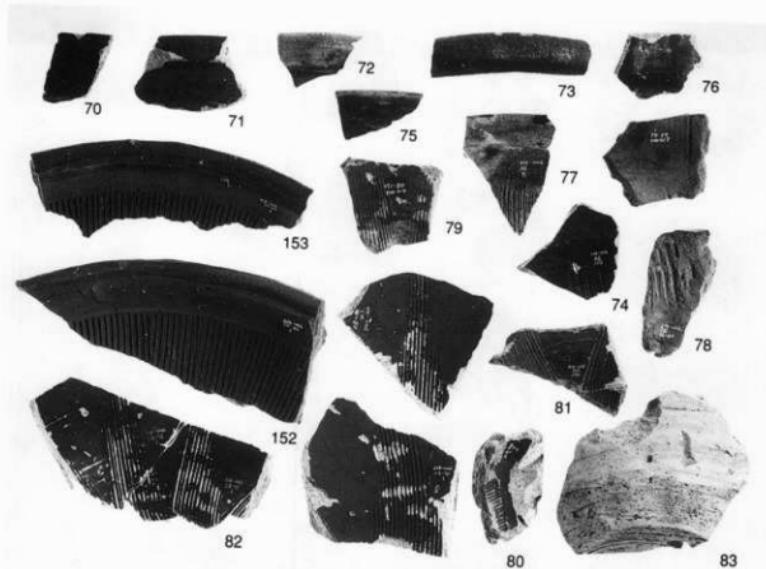
3. 第3地点発掘状況



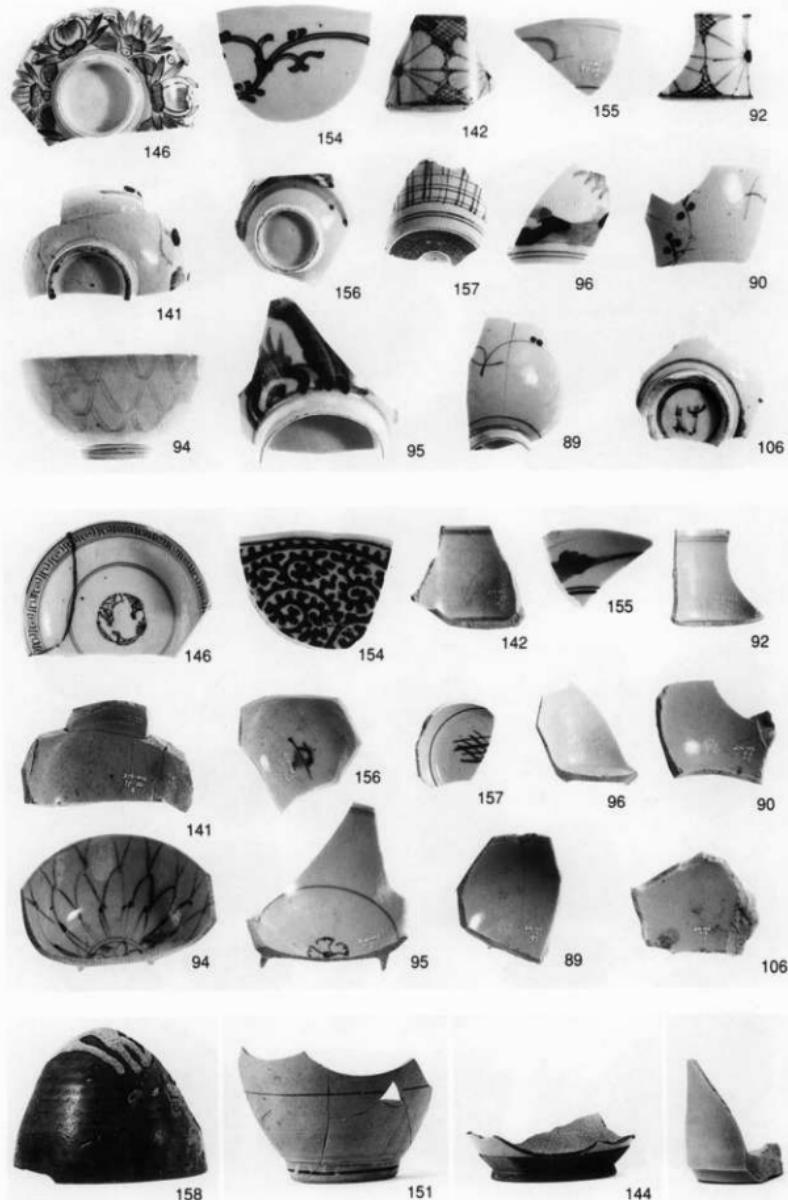
グリッド出土縄文土器及びカワラケ



土鍋、焙烙、土釜、火鉢



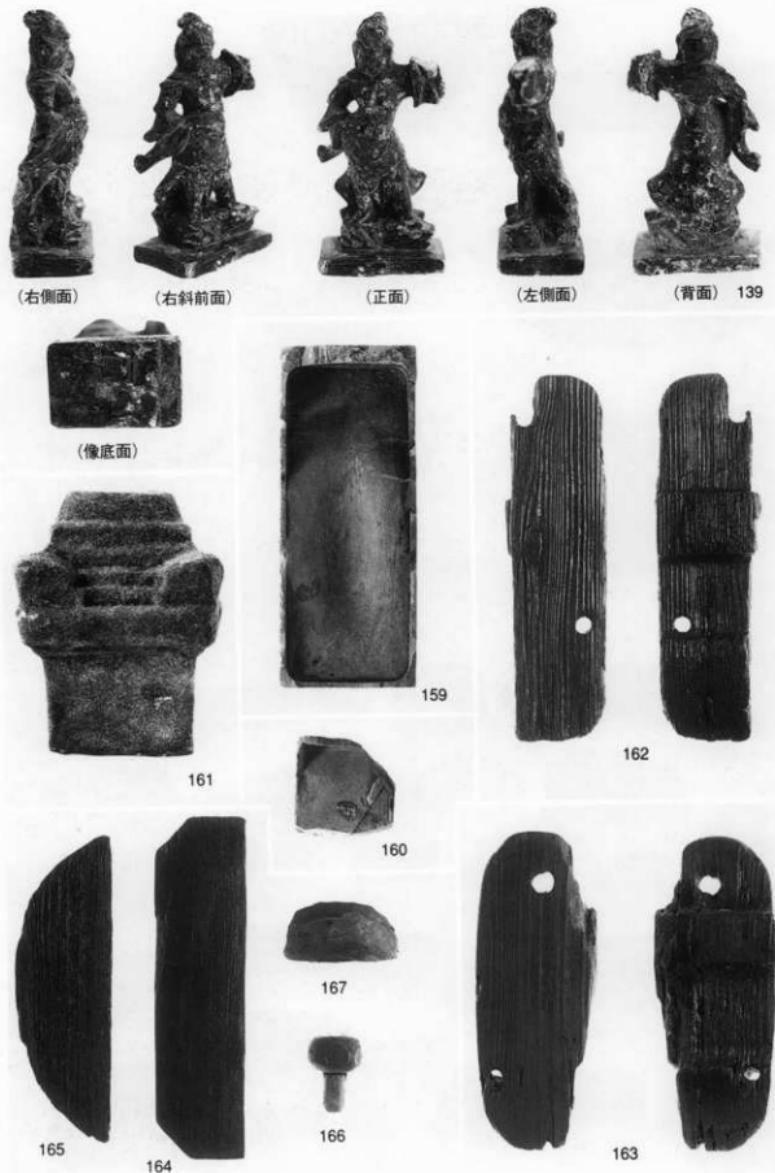
陶磁器(1)



陶 磁 器 (2)



陶磁器(3)、砥石



小金銅仏、宝篋印塔、硯、木製品

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ようかいいちばし おおさかい・とうのまえいせき						
書名	八日市場市大堺・塔ノ前遺跡						
副書名	主要地方道八日市場野栄線・緊急地方道路整備事業埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告						
シリーズ番号	第285集						
編著者名	高田 博						
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター						
発行機関	〒284 千葉県四街道市鹿渡809-2	TEL043-422-8811					
発行年月日	西暦 1996年3月29日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東經	調査期間	調査面積m ²	調査原因
ようかいいちばし 大堺・塔ノ前	ちばけん 千葉県 八日市場市 横須賀	12214	006 41分	35度 32分 50秒	1991111 ~ 19911226 19920701 ~ 19920930 19941101 ~ 19941121	22,240 1,000 6,530	主要地方道八日市場野栄線 ・緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
大堺・塔ノ前	低湿地	縄文時代	遺物出土地点2	縄文土器(後期)	下沼丸木舟出土地に隣接し、青灰色砂質土中から加曾利B式安行II式土器を検出		
		中近世	ピット群 溝状遺構	1 4	中近世土器・陶磁器、石製品、金銅製持国天像、木製品	砂堤部から横須賀城と関連する遺構・遺物を検出	

千葉県文化財センター調査報告第285集

八日市場市 大塚・塔ノ前遺跡

主要地方道八日市場野栄線・緊急地方道路整備事業埋蔵文化財調査報告書

平成8年3月29日 発行

編 集 財團法人 千葉県文化財センター

発 行 千葉県土木部
千葉市中央区市場町1-1

財團法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809-1

印 刷 株式会社 ライフ
千葉県成田市東和田595番地
